

改選

赤光

齋藤

茂吉

5

10

15

20

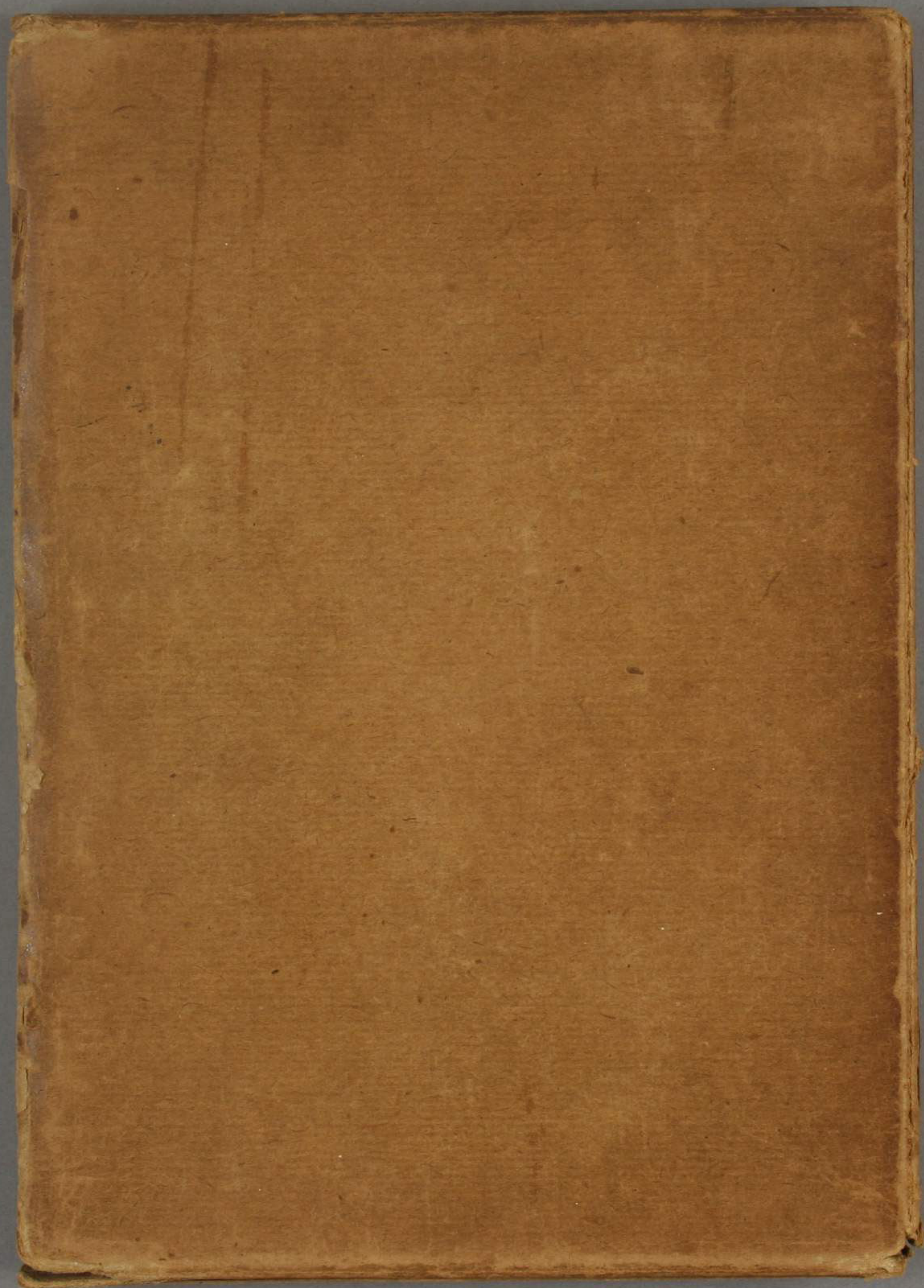
25

歌集

選改

赤光

齋藤茂吉



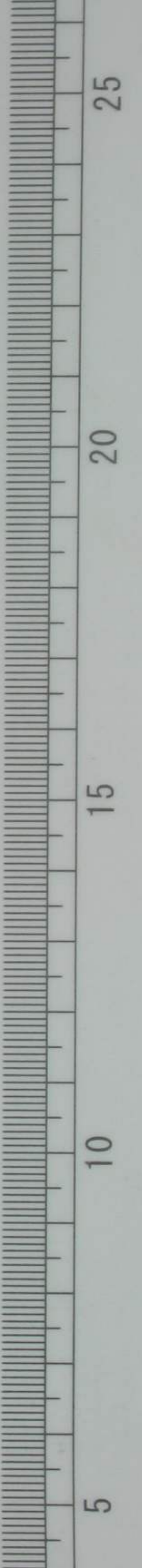
改 選

赤 光

齋 藤 茂 吉

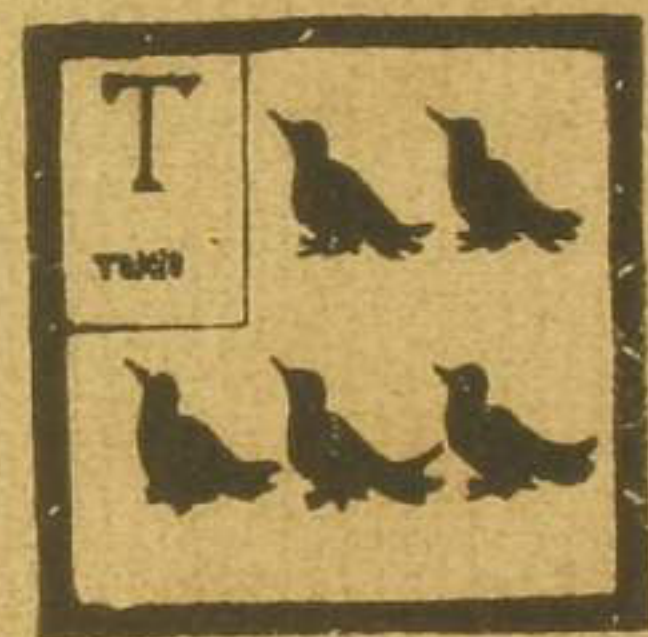


東 京 東 雲 堂 出 版



歌集赤光

齋藤茂吉



選 改
光 赤

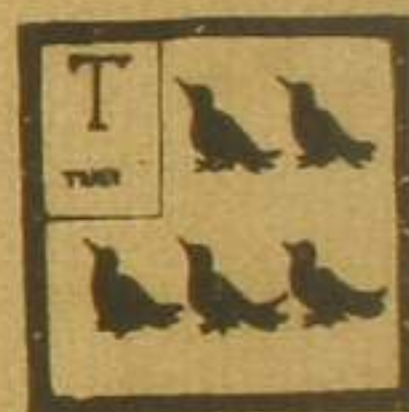
吉 茂 藤 齋



版 出 堂 雲 東 京 東

歌 集 赤 光

齋 藤 茂 吉



50

55

60

65

70

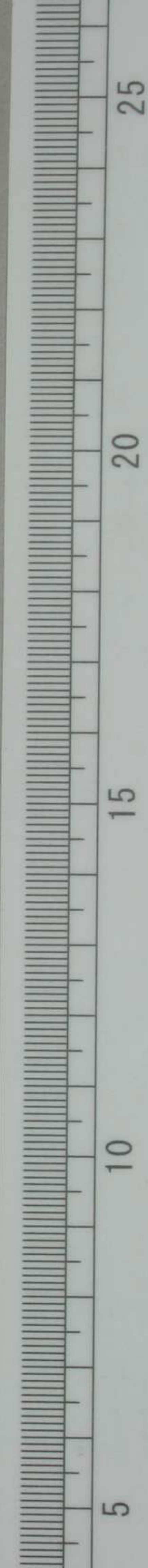
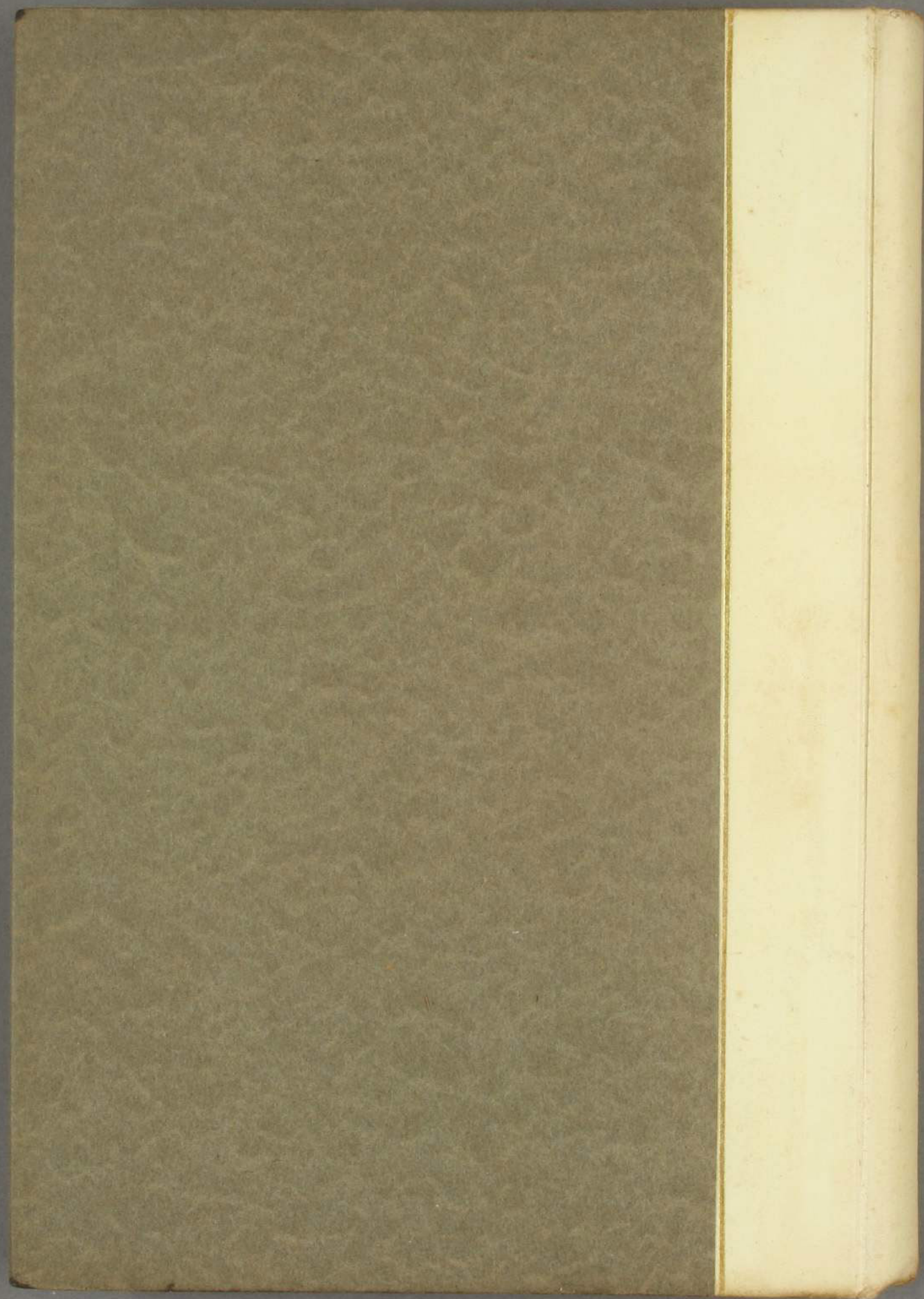
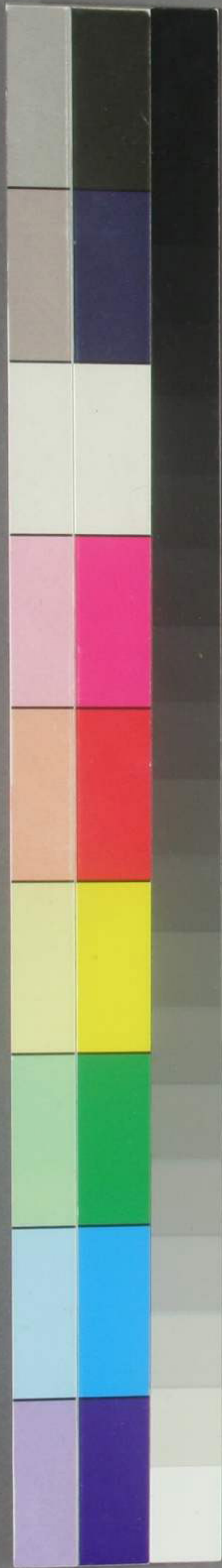
75

80

85

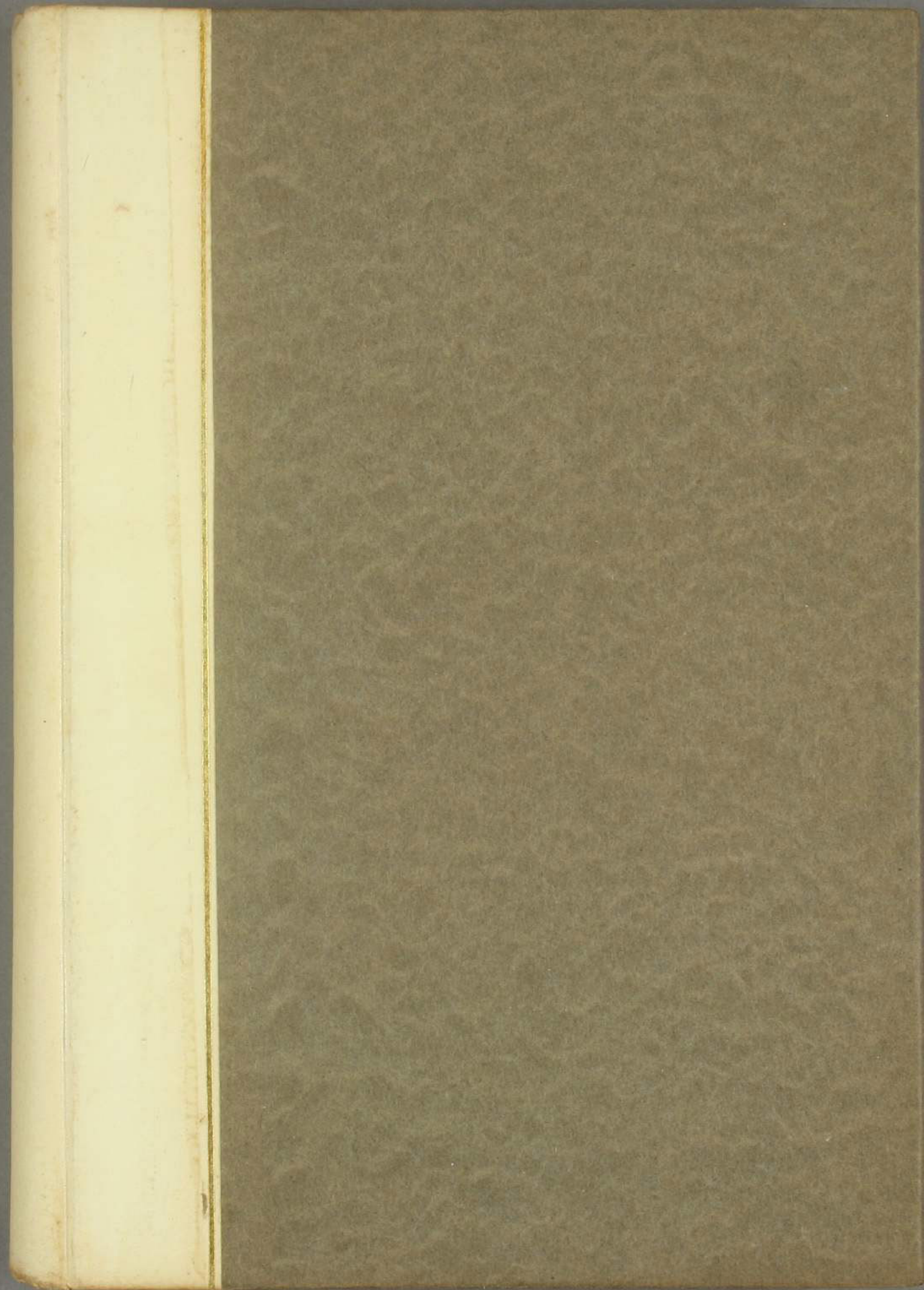
90

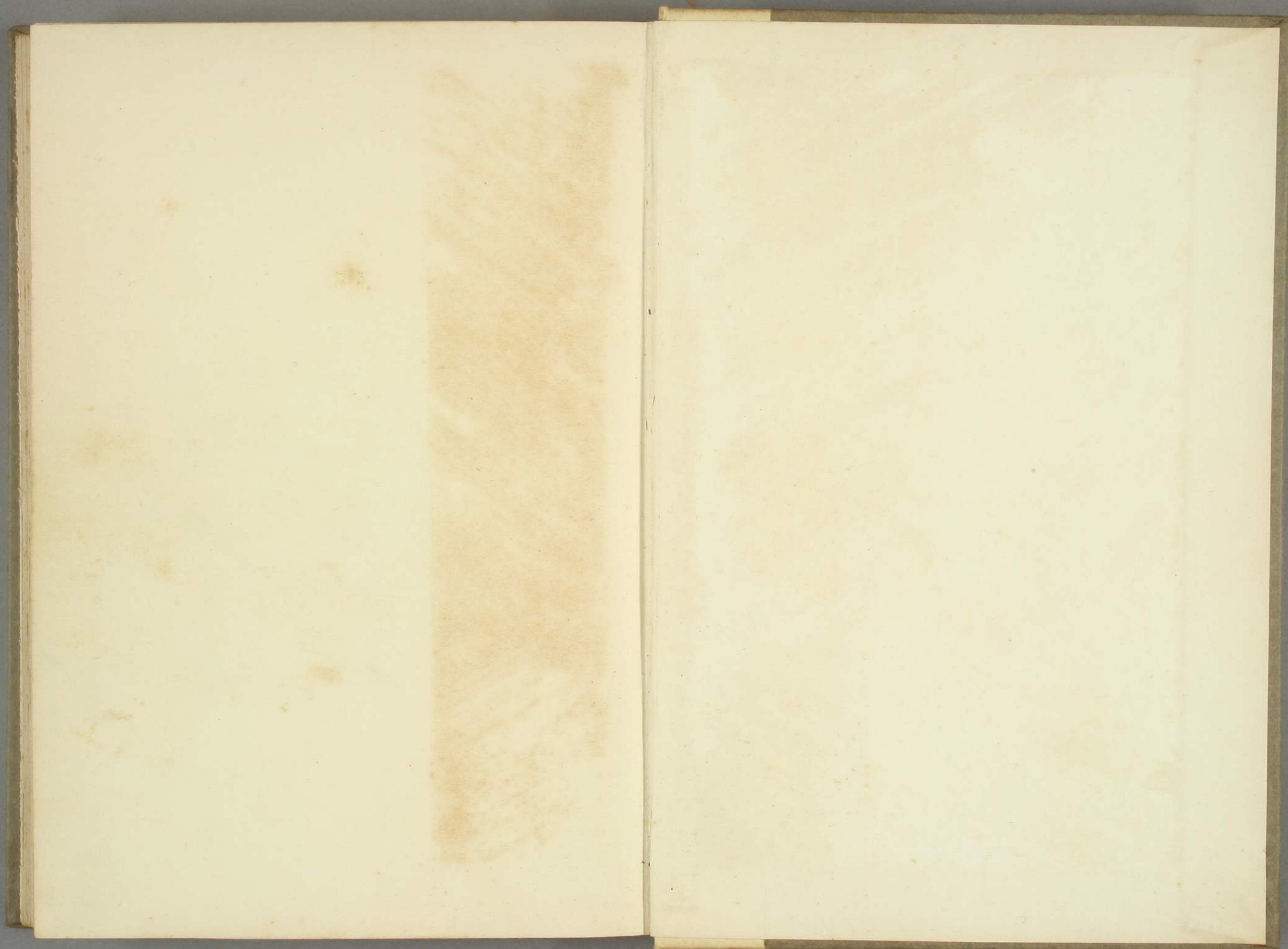
95



歌集
赤
光

齋藤茂吉





齊藤茂吉著

アララギ叢書第二編

歌集
選
赤
光

東京 東雲堂發行

齋藤茂吉著

アララギ叢書第二編

歌集

改選

赤

光

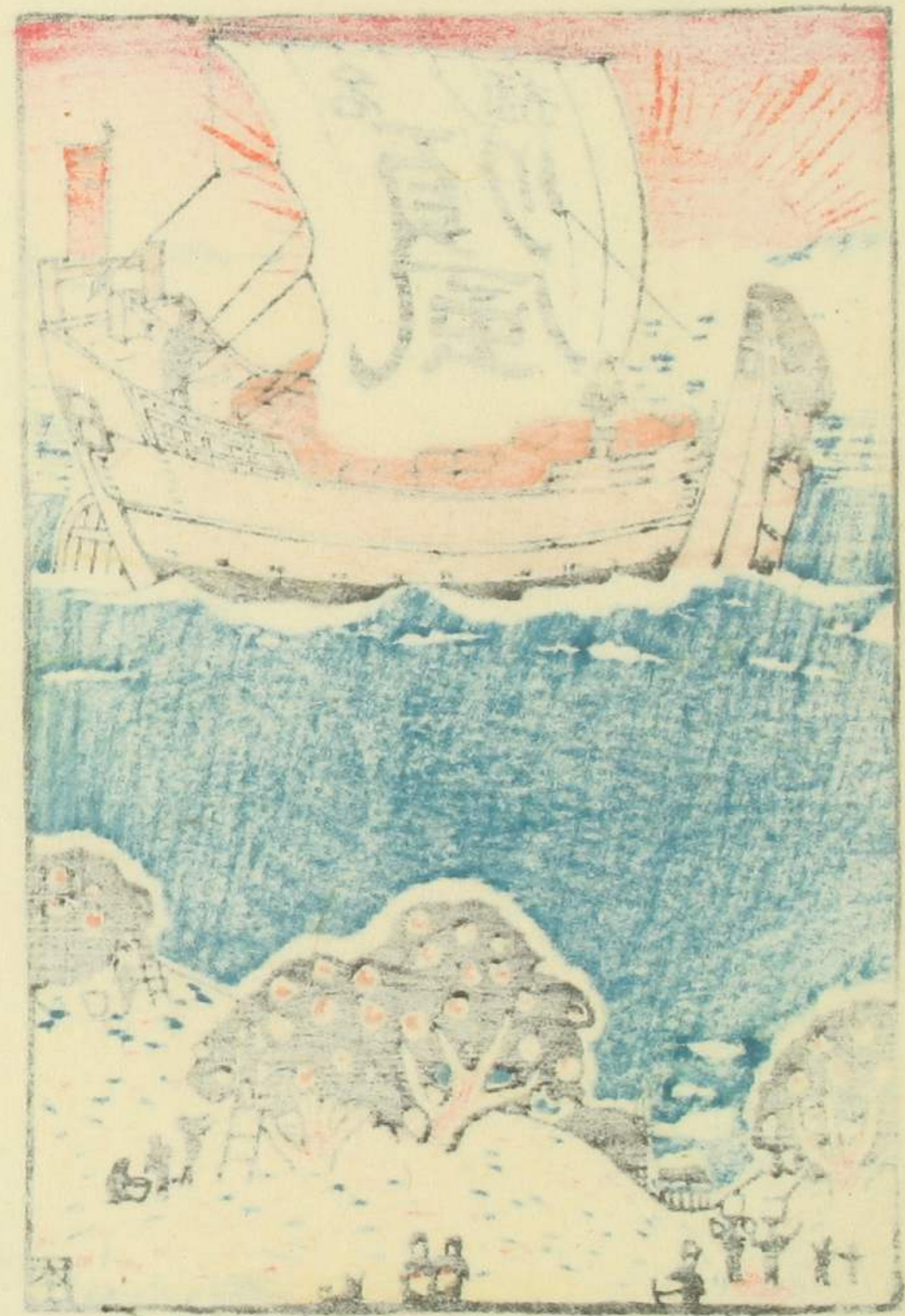
東京 東雲堂發行



名播風
海
...



自明治三十八年
至明治四十二年



1 折に觸れ

明治三十八年作

霜ふりて一^{ひと}もと立^たてる柿の木はあはれに
黒すみにけり

浅草の佛^{ほとけ}つくりの前來れば少女^{をとめ}まぼしく落日^{たそがれ}
を見るも

書よみて賢くなれと戦場のわが兄は錢を呉れ
たまひたり

戦場の兄よりとどきし錢もちて泣き居たりけ
り涙おちつつ

馬屋のべにをだまきの花とぼしらにをりをり
馬が尾を振りにけり

眞夏日の畑のなかに我居りて戦ふ兄をおもひ
けるかな

はるばると母は戦を思ひたまふ桑の木の実の
熟める畑に

たらちねの母の邊にゐてくるぐると熟める桑
の実を食ひにけるかな

熱いでて一夜寝しかばこの朝け梅のつぼみを
つばらかに見つ

春風の吹くことはげし朝ぼらけ梅のつぼみは
大きかりけり

桑畑の畑のめぐりに紫蘇生ひて断りて居れば
にほひするかも

入りかかる日の赤きころニコライの側の坂を
は下りて來にけり

寝て思へば夢の如かり山焼けて南の空はほの
赤かりし

さ庭への八重山吹の一技散りしばらく見ねば
みな散りにけり

數學のつもりになりて考へしに五目ならべに
勝ちにけるかも

かたむく日すでに眞赤くなりたりと物干に出
でて欠せりけり

ゆふさりてランプともせばひと時は心静まり
て何もせず居り

2 地獄極樂圖

明治三十九年作

淨玻璃にあらはれにけり脇差を差して女をい
ぢめるどころ

飯の中ゆとろとろと上る炎見てほそき炎口の
おどろくところ

赤き池にひとりぼつちの眞裸まはだかのをんな亡者の
泣きゐるところ

いろいろの色の鬼ども集りて蓮はすの華はなにゆびさ
すところ

人の世よに嘘うそをつきけるもろもろの亡者むじやうの舌を
抜き居ゐるところ

罪計つみはかりに涙なみだながしてゐる亡者むじやうつみを計れば巖いはよ
り重おもき

にんげんは馬牛うまうしとなり岩負いわおひて牛頭馬頭にゆうばとうども
の追おひ行くところ

をさな兒この積みし小石こいしを打うくづし紺くろいろの鬼
見てゐるところ

もろもろは裸はだかになれど衣ころも剝ぐひとりの婆の口
赤きところ

白き華はなしろくかがやき赤き華あかき光を放ち
ゐるところ

ゐるものは皆ありがたき顔をして雲ゆらゆら
と下おり來るところ

3 螢と蜻蛉

明治三十九年作

蠶この部へ屋やに放ちし螢あかねさす晝なりしかば
首すぢあかし

蚊帳のなかに放ちし螢夕さればおのれ光りて
飛びそめにけり

あかときあきの草くさの露つゆ玉たま七なないろにかがやきわたり
蜻蛉あきづうまれぬ

あかときあきの草くさに生うれて蜻蛉あきづはも未いまだ軟やわらかみ
飛とびがてぬかも

小田をだのみち赤羅あからひく日はのぼりつつ生うれし蜻あき蛉づ
もかがやきにけり

4 折をに觸ふれて

明治三十九年作

來きて見みれば雪ゆき消けの川がはべしろがねの柳やなぎふふめり
露つゆの臺たいも咲さけり (早春二首)

あづさゆみ春はるは寒ふけど日ひあたりのよろしき處
つくづくし萌もゆ

生きて來し丈夫がおも赤くなり踊るを見れば
嬉しくて泣かゆ (凱旋二首)

凱旋り來て今日のうたげに酒をのむ海のます
らをに髯あらずけり

み佛の生れましの日と玉蓮をさな朱の葉池に
浮くらし (佛生會二首)

み佛の御堂に垂るゝ藤なみの花のむらさき未
だともしも

青玉のから松の芽はひさかたの天にむかひて
竝びてを萌ゆ (若芽二首)

はるさめは天の乳かも落葉松の玉芽あまねく
ふくらみにけり

みちのくの佛ほとけの山のこごしこごし岩いわ秀ひでに立ち
て汗あせふきにけり (立石寺一首)

天あまの露つゆおちくるなべに現あらわし世よの野のべに山やまべに
秋花あきばな咲さけり

涅槃ねはん會えをまかりて來きれば雪ゆきつめる山やまの彼かなた方たに
夕ゆふ燒やきのすも

小瀧こたきまで行ゆ著つきがてにくたびれし息いきづく坂さかよ
山鳩やまとのこゑ

夕ゆふひかる里さとつ川がは水みづ夏なつくさにかくるる處ところまろき
山見やまみゆ

淡青たんじやうの遠とほのむら山やまたび來きつるわが目めによしと
寢ねつつ見みにけり

火の山を繞る秋雲の八百雲をゆらに咲きまく
 天つ風かも (藏王山五首)

岩の秀に立てばひさかたの天の川南に垂れて
 かがやきにけり

天なるや群がりめぐる高ぼしのいよいよ清し
 山高みかも

雲の中の藏王の山は今もかもけだもの住まず
 石あかき山

あめなるや月讀の山はだら牛うち臥すなして
 目に入りにけり

病癒えし君がにぎ面の髯あたり目にし浮びて
 うれしくてならず (藤真氏病癒ゆ)

5 蟲

明治四十年作

花につく赤小蜻蛉もゆふされば眠りにけらし
こほろぎのこゑ

とほ世べの戀のあはれをこほろぎの語り部が
夜々つぎかたりけり

月落ちてさ夜ほの暗く未だかも彌勒は出でず
蟲鳴けるかも

ヨルダンの河のほとりに蟲鳴くと書に残りて
年ふりにけり

てる月の清き夜ごろを蟋蟀やねもころころに
牽寢て鳴くらむ

きのふ見し千草もあらず蟲の音も空に消入り
うらさびにけり

あきの夜のさ庭に立てば土の蟲音はほそほそ
と悲しらに鳴く

なが月の秋ゑらぎ鳴くこほろぎに螻蛄も交り
てよき月夜かも

6 雲

明治四十年作

かぎろひの夕べの空に八重なびく朱の旗ぐも
遠にいざよふ

岩根ふみ天路をのぼる脚底ゆいかづちぐもの
湧き卷きのぼる

藏王の山はらにして目を放つ磐城の諸嶺くも
湧ける見ゆ

底知らに瑠璃のただよふ天の門に凝れる白雲
誰まつ白雲

岩ふみて吾立つやまの火の山に雲せまりくる
五百つ白雲

遠ひとに吾戀ひ居れば久かたの天のたな雲に
鶴とびにけり

あめつちの寄り合ふきはみ晴れとほる高山の
背に雲みそむ見ゆ

八重山の八谷かせ起る時のまや峡間みなざり
て雲たちわたる

たぐひれのかげのよろしき妹が名の豊旗雲と
誰がいひそめし

小旗ぐも大旗雲のなびかひに今し八尺の日は
入らむとす

いなびかりふくめる雲のたたまひ物ほしに
のぼりつくづくと見つ

ひと國をはるかに遠き天ぐもの氷雲のほとり
行くは何ぞも

雲に入る薬もがもと雲戀ひしもろこしの君は
昔死にけり

ひむがしの天の八重垣しるがねと笹べり耀く
渡津見の雲

7 菊しほ

明治四十年作

秋のひかり土にしみ照り菊しほに黄ばめる小
田を馬の來る見ゆ

竹おほき山への村の冬しづみ雪降らなくに寒
に入りけり

ふゆの日のうすらに照れば竹群は寒々として
霜しづくすも

窓の外に月照りしかば竹の葉のさやのふる舞
あらはれにけり

霜の夜のさ夜のくだちに戸を押すや竹群が奥
に朱の月みゆ

竹むらの影にむかひて琴ひかば清搔すがきにしも弾ひ
くべかりけり

月あかきもみちの山に小猿こさるども天あまつ領巾ひなど
欲ほりしてをらむ

猿の子の目のくりくりを面白み日の入りがた
をわが加へるなり

8 留守居

明治四十年作

まもりゐる縁えんの入日に飛びきたり蠅はが手を揉も
むに笑ひけるかも

留守居して一人し居れば青光あをひかる蠅はのあゆみを
おもひ無なに見し

留守をもちるわれの机にえ少女のえ少男の蠅が
ゑらぎ舞ふかも

秋の日の疊の上に飛びあよむ蠅の行ひ見つつ
留守すも

入日さすあかり障子は薔薇色にうすら勻ひて
蠅一つ飛ぶ

事なくて見ゆる障子に赤とんぼかうへ動かす
羽さへふるひ

まもりぬのあかり障子にうつりたる蜻蛉は去
りて何も来ぬかも

留守もりて入日あかけれ紙ふくる猫に冠せん
とおもほえなくに

9 新年の歌

明治四十一年作

今しいま年の來るとひむがしの八百うづ潮に
茜かがよふ

高ひかる日の母を戀ひ地の廻り廻り極まりて
天新たなり

東海に礮廬生れていく繼ぎの眞日美はしく
天明けにけり

ひむがしの朱の八重ぐもゆ斑駒に乗りて來ら
しも年の若子は

にひとしの眞日のうるはしくれなるを高きに
上り自蔭して見つ

新装ふ日の大神の清明目を見まくと集ふ現し
もろもろ

天明り年のきたるとくたかけの長鳴鳥がみな
鳴けるかも

しだり尾の鶏の雄鳥が鳴く聲の野に遠音して
年明けにけり

ひむがしの空押し晴るし守らへる大和島根に
春立てるかも

うるはしと思ふ子ゆゑに命欲り夢のうつらと
年明けにけり

沖つとりかもかもせむと初春にこころ問して
見まくたぬしも

おほきみの大城の森の濃緑のいやとことには
年ほぐらしも

豊酒の屠蘇に吾るへば鬼子ども皆死しにけり
赤き青きも

くれなるの梅はよろしもあらたまの年の始に
見ればよろしも

10 雑

歌

明治四十一年作

あかときの畑の土のうるほひに散れる桐の花
ふみて來にけり

青桐のしみみ廣葉の葉かげよりゆふべの色は
ひろごるらしき

ひむがしのもしび二つこの宵も相寄らなく
てふけわたるかな

うつそみのこの世のくにに春さりて山焼くる
かも天の足夜を

ひさ方の天の赤瓊のほひなし遙けきかもよ
山焼くる火は

うつし世は一夏に入りて吾がこもる室の疊に
蟻を見しかな

眞夏日の雲のみね天のひと方に夕退きにつつ
かがやきにけり

荒磯ねに八重寄る波のみだれたちいたぶる中
の寂しさ思ふ

秋の夜の灯しづかに揺る、時しみじみわれは
耳かきにけり

ほそほそとこほろぎ鳴くに壁にもたれ膝に手
を組む秋の夜かも

旅ゆくと泉に下りて冷々に我が口そそぐ月く
さのはな

11 鹽原行

明治四十一年作

晴れ透るあめ路の果てに赤城嶺の秋の色はも
更け渡りけり

小筑波を朝を見しかば白雲の凝れるかかむり
動くともせず

關屋いでて坂路になればちらりほらり染めた
る木々が見えきたるかも

おり上り通り過がひしうま二つ遙かになりて
尾を振るが見ゆ

山角にかへり見すれば歩み來し街道筋は細り
てはるけし

馬車とごろ角を吹き吹き鹽はらのもみづる山
に分け入りにけり

山路わだ紅葉はふかく山たかくいよよ逼り來
わがまなかひに

つぬさはふ岩間を垂るるいは水のさむざむと
して土わけ行くも

とうとうと喇叭を吹けば鹽はらの深染の山に
馬車入りにけり

湯のやどのよるのねむりはもみち葉の夢など
見つつねむりけるかも

夕ぐれの川べに立ちて落ちたぎつ流るる水に
おもひ入りたり

あかときを目ざめて居ればくだの音の近くに
止みぬ馬車着けるらし

床ぬちにぬくまり居れば宿つ女が起きねと云
へど起きがてぬかも

世のしほと言のたふとき名に負へる鹽はらの
山色づきにけり

谷川の音をききつつ分け入れば一あしごとに
山あざやけし

山深くひた入り見むと露じもに染みし紅葉を
踏みつつぞ行く

三千尺の目下の極みかがよへる紅葉のそこに
水たぎち見ゆ

かへらみる谷の紅葉の明らけく天にひびかふ
山がはの鳴り

現し身が戀心なす水の鳴りもみちの中に籠り
て鳴るも

山川のたぎちのどよみ耳底にかそけくなりて
峯を越えつも

ふみて入るもみちが奥は横はる朽ち木の下を
水ゆく音す

山がはの水のいきはひ大岩にせまりきはまり
音とごろくも

うつそみは常なけれども山川に映ゆる紅葉を
うれしみにけり

うつし身の稀らにかよふ秋やまに親しみて鳴
く蟋蟀のこゑ

打ちわたす山の雑木の黄にもみち明るき峽に
道入りにけり

もみち原ゆふぐれしづむ蟋蟀はこの寂しさに
堪へて鳴くなり

つかれより美し夢に入る如き思ひぞ吾がする
蟋蟀のこゑ

もみぢ照りあかるき中に我が心空しくなりて
しまし居りけり

しほ原の湯の出でどころとめ來ればもみぢの
赤き處なりけり

山の湯のみなもとどころ鐵色にさびにけるか
な草もおひなく

鐵さびし湯の源のさ流に蟹がいくつも死にて
居たりし

あまつ日は山のいただきを照らしたりふかき
峽間の道のつゆじも

親馬おやうまにあまえつつ來る仔馬こうまにし心動きて過ぎ
がてにせり

あしびきの山のはざまの西開き遠とほくれなるに
夕焼くる見ゆ

橋のべのちひさ楓かへてかへり路ぢになかくれなると
染めて居りけり

天地あめとちのなしのまにまに寄り合へる貝の石あは
れとことばにして

ほり出いすいはほのひまの貝の石ただ珍らしみ
ありがてぬかも

おくやまの深き岩いわ間まゆ海つもの石と成り出づ
君に戀ふるとき

もみぢばの過ぎしを思ひ繁き世に生きつるな
 べに悲しみにけり

山峽のもみぢに深く相こもりほれ果てなむか
 峽のもみぢに

もみぢ斑の山の眞洞に雲おり來雲はをとめの
 領巾漏らし來も

火に見ゆる玉手の動き少女らは何に天降りて
 もみぢをか焚く

天そそる白くもが上のいかし山夜見の國さび
 月かたむきぬ

まぼろしにもの戀ひ來れば山川の鳴る谷際に
 月満てりけり

12 折に觸れて

明治四十二年作

潮沫しほのはかなくあらばもろ共にいづべの方に
ほろびてゆかむ

やうらくの珠たまはかなしと歎なげかひし女をんなのころ
うつらさびしも

宵あさくひとり籠ればうらがなし雨蛙あまがへるひとつ
かいかいと鳴くも

をさな妻こころに守まもり更けしづむ灯火ともしびの蟲を
殺してゐたり

かがまりて見つつかなしもしみじみと水湧き
居れば砂うごくかな

夏晴れのさ庭の木かげ梅の實のつぶらの影も
さゆらぎて居り

春はる闌たけし山やま峽がひの湯にしづ籠りた惚らの芽食をしつつ
ひとを思はず

馬に乗り湯どころ來つつ白梅のとこのふ春に
あひにけるかも

ひそり居て卵うでつつたざる湯にうごく卵を
見ればうれしも

干せ柿がきを弟の子に呉れ居れば淡あは々たと思ひいつる
ことあり

ゆふぐれのほども雪路ゆきぢをかうべ垂れ濡れたる
靴をはきて行くかも

世のなかの憂^{うれ}苦^くも知らぬ女^めわらはの泣^なくこと
 はあり涙^{なみだ}がして

春の風ほがらに吹^ふけばひさかたの天^{あま}の高^{たか}低^{ひか}に
 凧^{たこ}が浮^うべり

萱^{くわん}さうの小^こさき蒨^{せん}を^を見^みてを^をれば胸^{むね}のあ^あたりが
 う^うれしくなりぬ

青^{あお}山^{やま}の町^{まち}か^かげの田^での畔^{ほとり}み^みちを^をそ^そぞろに^に來^きつれ
 春^{はる}あ^あさ^さみ^みか^かも

春^{はる}あ^あさ^さき^き小^こ田^たの朝^{あさ}道^{みち}あ^あか^かと^と金^{かね}氣^け浮^うく^く水^{みづ}に
 か^かぎ^ぎろ^ろひ^ひの^のた^たつ

明^あけ^けが^がた^たに^に近^{ちか}き^き夜^よさ^さま^まの^のお^おの^のづ^づか^から^ら我^{われ}心^{こころ}に^にし
 觸^ふる^るら^らく^く思^{おも}は^はゆ

天竺てんじくのほとけの世より子らが笑わらにくからなく
て君も笑むかな

さみだれはきのふより降り行い々き子をほのぼの
やさしく聞く今宵こんじよかも

八百やっ會あひのうしほ遠とほ鳴なるひむがしのわたつ天明あきあけ
雲くだるなり

13 細り身

明治四十二年作

重おもかりし熱あつの病びやうのかくのごと癒なごえにけるかと
かひな撫なるも

67 蝸かき蟬せみのまちかくに鳴くあかつきを衰へはてて
ひとり臥ふし居り

あなうま粥強飯を食すなべに細りし息の太り
ゆくかも

おとろへて寢床の上にものおもふ悲しきかな
や蠅の飛ぶさへ

たまたまに現しき時はわが命生きたかりしか
このうつし世に

病みて思ふほのぼのとしてあり經たる和世の
我に悔は多かり

いはれ無に涙がちなるこのごろを事更ぶとも
ひと云ふらむか

しまし間も今の悶への酒狂になるを得ばかも
嬉しかるべし

閉づる目ゆ熱き涙のはふり落ちはふり落ちつ
つあきらめ兼ねつ

やみ恍惚おとろへにたれさ庭べに夕雨ふれば
嬉しくきこゆ

みちのくに我稚くて熱を病みしことを仄かに
思ひいでつも

おとろへし胸に眞手おき寂しめる我に聞ゆる
蜩のこゑ

熱落ちて衰へ出で來このごろの日八日夜八夜
は現しからなく

恣にやせ頬にのびし硬ひげを手ぐさにしつ
つさ夜ふけにけり

うそ寒くなりて目ざめし室の外は月清く照り
 雞なくきこゆ

かうべあげ見れば狭庭の椎の木の間おほき月
 入るよるは静かに

ぬば玉のふくる夜床に目ざむればをなご狂の
 歌ふがきこゆ

日を繼ぎて現身さぶれ蟬の聲もいよよ清しく
 なりにけるかな

現身は悲しけれごもあはれあはれ命いきなむ
 とつひにおもへり

おのが身しいとほしければかほそ身をあはれ
 がりつつ飯食しにけり

火鉢べにほほ笑^{わら}ひつつ花火する子供と居れば
われもうれしも

病みて臥すわが枕べに弟妹^{いもうと}らがこより花火を
して呉れにけり

わらは等は汝^な兄^えの面^{おもて}のひげ振りのをかしなど
いひ花火して居り

平凡に堪へがたき性^{さが}の童^{わら}幼^はども花火に飽きて
みな去りにけり

**

とめどなく物思ひ居ればさ庭べに未だいはけ
なく蟋蟀鳴くも

宵淺き庭を歩めばあゆみ路のみぎりひだりに
蟋蟀鳴くも

つめたき土にうまれし蟋蟀のまだいはけなく
鳴ける寂しさ

さ庭べに何の蟲ぞも鉦うちて乞ひのむがごと
ほそほそと鳴くも

なにゆるゑに花は散りぬる理法と人はいふとも
悲しくおもほゆ

たまゆらに灰觸れにけれ延ふ鳶の別れて遠し
かなし子等はも

いつくしく瞬きひかる七星の高天の戸にちか
づきにけり

神無月の土の小床にほそほそと亡びのうたを
蟲鳴きにけり

うらがれにしづむ花野の際涯よりとほくゆく
らむ霜夜こほろぎ

よひよひの露冷えまさる遠空をこほろぎの子
らは死にて行くらむ

14 分 病 室

明治四十二年作

この度は死ぬかも知れずと思ひし玉ゆら氷枕
の氷とけ居たりけり

隣室に人は死ねどもひたぶるに帯ぐさの實食
ひたかりけり

熱落ちてわれは日ねもす夜もすがら稚な兒の
ごと物を思へり

のびあがり見れば霜月の月照りて一本松のあ
たまのみ見ゆ



熟落ちてわれは白ねもす夜もすがら稚な兒の
ごと物を思へり

のびあがり見れば霜月の月照りて一本松のあ
たまのみ見ゆ



明治四十三年

1 田螺と彗星

とほき世のかりようびんがのわたくし兒田螺
はぬるきみづ戀ひにけり

田螺はも背戸の圓田にゐると鳴かねどころり
ころりと幾つもあるも

わらくすのよごれて散れる水無田に田螺の殻
は白くなりけり

氣ちがひの面まもりてたまさかは田螺も食べ
てよるいねにけり

赤いろの蓮まる葉の浮けるとき田螺はのどに
みごもりぬらし

味噌うづの田螺たうべて酒のめば我が咽喉佛
うれしがり鳴る

ためらはす遠天に入れと彗星の白きひかりに
酒たてまつる

うつくしく瞬きてゐる星ぞらに三尺ほどなる
ははき星をり

2をさな妻

墓はらのとほき森よりほろほろと上^{のほ}るけむり
に行かむとおもふ

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさに
づらふ時たちにけり

をさな妻こころに持ちてあり經^ふれば赤^{あか}小^こ蜻^{あき}蛉^つ
の飛ぶもかなしき

目を閉づれすなはち見ゆる淡々し光に戀ふる
もさみしかるかな

ほこり風立ちてしづまるさみしみと市^{いち}路^ぢゆき
つつかへりみるかも

このゆふべ屏にかわけるさび紅のべにがらの
垂りをうれしみにけり

嘴あかき小鳥さへこそ飛ぶならめはるばる飛
ばは悲しきろかも

細みづにながるる砂の片寄りに静まるほどの
うれひなりけり

水さびるる細江の面に浮きふむこの水草は
うごかざるかな

汗ばみしかうべを垂れて抜け過ぐる公園に今
しづけさに會ひぬ

をさな妻ほのかに守る心さへ熱病みしより細
りたるなれ

3 悼堀内卓

堀内はまこと死にたるかありの世か
いめ世かくやしいたましきかも

信濃路のゆく秋の夜のふかき夜をなにを思ひ
つつ死にてゆきしか

うつそみの人の國をば君去りて何邊にゆかむ
ちちははをおきて

早はやも癒りて來よと祈むわれになにゆるに
逝きし一言もなく

いまよりはまことこの世に君なきかありと思
へごうつつにはなきか

深き夜のとづるまなこにおもかげに見えくる
友をなげきわたるも

霜ちかき蟲のあはれを君と居て泣きつゝ聞か
むと思ひたりしか(十月作)

明治四十四年

1 此の日頃

よるさむく火を警いさむるひようしぎの聞え來る
頃はひもじかりけり

こよひはいまだ淺宵あさなれど床ぬちのびつつ
何か考へむとおもふ

尺八しゃくはちのほろほろと鳴りて行く音ねも此世このよの涯はてに
遠とほざかりなむ

入りつ日の赤き光のみなぎらふ花野はなはとほく
恍惚とと溶とくるなり

さだめなきものの魔まの來る如く胸むねゆらぎして
街まちをいそげり

うらがなしいかなる色の光ひかりはや我われのゆくへに
かがよふらむか

生くるもの我われのみならず現うらし身の死にゆくを
聞きつつ飯食いひしにけり

をさなごの獨ひとり遊ぶを見守りつつ心よろしく
なりてくるかも(二月作)

2 おく に

なにか言ひたかりつらむその言も言へなくな
りて汝は死にしか

はや死にて汝はゆきしかいとほしと命のうち
にいひにけむもの

終に死にて往かむ今際の目にあはず涙ながら
にわれは居るかな

なにゆゑに泣くと額なで虚言も死に近き子に
吾は言へりしか

うつし世のかなしき汝に死にゆかれ生きの命
も今は力なし

もろ足もかいほそりつつ死にし汝があはれに
なりてここに居りがたし

ひとたびは癒りて呉れよとうら泣きて千重に
いひしがつひに空しき

この世にし生きたかりしか一念も申さず逝き
しをあはれとおもふ

何れも彼もあはれになりて思ひづるお國のひと
世はみぢかかりしか

せまりくる現實は悲ししまらくも漂ふごとき
ねむりにゆかむ

やすらなる眠もがもと此の口ごろ眠ぐすりに
親しみにけり

なげかひも人に知らえず極まれば何に絶りて
吾は行きなむか

しみ到るゆふべのいろに赤くゐる火鉢のおき
のなつかしきかも

現身のわれなるかなと歎かひて火鉢をちかく
身に寄せにけり

ちから無く鉛筆さればほろほろと紅の粉が落
ちてたまれり

灰のへにくれなるの粉の落ちゆくを涙ながし
ていとほしむかも

生きてゐる法がすがたのありありと何に今頃
見えきたるかや（二月作）

3 うつし身

雨にぬるる廣葉細葉の若葉森あが言ふころの
やさしくきこゆ

いとまなき吾なればいま時の間の青葉の揺も
見むとしおもふ

しみじみとおのれ親しき朝じめり墓原の蔭に
道ほそるかな

やはらかに濡れゆく森のゆきすりに生の命の
吾をこそ思へ

よにも弱き吾なれば忍ばざるべからず雨ふる
よ若葉かへるで

うつしみは死しぬ此のごと吾は生きて夕いひ
食しに歸りなむいま

黒土に足駄の跡のつづけるを墓のほそみちに
かへり見にけり

うちどよむ衢のあひの森かげに残るみづ田を
いとしくおもふ

青山の町蔭の田の水さび田にしみじみとして
雨ふりにけり

森かげの夕ぐるる田に白きとり海とりに似し
ひるがへり飛ぶ

寂し田に遠來し白鳥見しゆるゑに弱ければ吾は
うれしくて泣かゆ

くわん草は丈やのびて濕りある土に戦げり
このいのちはや

はるの日のながらふ光に青き色ふるへる麥の
嫉くてならぬ

春浅き麥のはたけにうごく蟲手ぐさにはすれ
悲しみわくも

うごき行く蟲を殺してうそ寒く麥のはたけを
横ぎりにけり

いとけなき心葬りのかなしさに蒲公英を掘る
せとの岡べに

灰かにも吾に親しき豫言をいはまくすらしき
黄いろ玉はな(四月五月作)

4 うめの雨

おのが身をいとほしみつつ
 歸り來る夕細道に
 柿の花落つも

はかなき身も死にがてぬこの心君し知れらば
 共に行きなむ

さみだれのけならべ降れば梅の實の圓大きく
 ここよりも見ゆ

天に戦ぐほそ葉わか葉に群ぎもの心寄りつつ
 なげかひにけり

かぎろひのゆふさりくれど草のみづかくれ水
 なれば夕光なしや

ゆふ原の草かげ水にいのちいくる蛙かへるはあはれ
啼きたるかなや

うつそみの命は愛をしとなげき立つ雨の夕原ゆふばらに
音鳴ねくものあり

くろく散る通草あけびの花のかなしさを稚わかくてこそ
おもひそめしか

おもひ出も遠き通草の悲し花きみに知らえず
散りか過ぎなむ

道のべの細川もいま濁りみづいきほひながる
夜の雨ふり

汝兄なよ汝兄なたまごが鳴くといふゆゑに見に行
きければ卵が鳴くも

あぶなくも覺束おぼつかなけれ黄いろなる圓きうぶ毛
が歩みてゐたり

見てを居り心よろしも鶏の子はつ**い**ばみ乍ながら
ゐねむりにけり

庭つとり鶏けいのひよこも心こころがなし生れて鳴けば
母にし似るも

乳のまぬ庭とりの子は自おのづから哀あはれなるかも
よ物食ものみにけり

常のごと心足らはぬ吾ながらひもじくなりて
今かへるなり

たまたまに手など觸れつつ添そひ歩む枳かき殻か垣かきに
ほこりたまれり

ものがくれひそかに煙草すふ時の心よろしさ
のうらがなしかり

青葉空雨になりたれ吾はいまこころ細ほそと
別れゆくかも

天さかり行くらむ友に口寄せてひそかに何か
いひたきものを (五月六月作)

5 藏王山

藏王^{ざうわう}をのぼりてゆけばみんなみの吾妻^{むづめ}の山に
雲のゐる見ゆ

たち上^{のぼ}る白雲のなかにあはれなる山鳩啼けり
白くものなかに

ま夏日の日のかがやきに櫻實は熟みて黒しも
われは食みたり

あまつ日に目蔭をすれば乳いろの湛かなしき
みづうみの見ゆ

死にしづむ火山のうへにわが母の乳汁の色
みづ見ゆるかな

秋づけばはらみてあゆむけどものも酸のみづ
なれば舌觸りかねつ

赤蜻蛉むらがり飛べどこのみづに卵うまねば
かなしかりけり

ひんがしの遠空にして一すぢのひかりは悲し
荒磯しらなみ（八月作）

6 秋の夜ごろ

玉きはる命いのちをさなく女め童わらわをいだき遊あそびき夜よ半はん
のこほろぎ

こよひもひとりねむるとうつらうつら悲かなしき
蟲むしに聞きほくるなり

ことわりもなき物もの怨うらみ我身わがみにもあるが愛あいしく
蟲むしききにけり

少年せうねんの流ながされびとをいたましとこころに思おもふ
蟲むししげき夜よに

秋あきなればこほろぎの子この生うまれ鳴なく冷ひやたき土つちを
かなしみにけり

少年の流され人はさ夜の
小床に蟲なくよ何の
蟲よといひけむ

かすかなるうれひにゆるるわが心蟋蟀聞くに
堪へにけるかな

蟋蟀の音にいづる夜の静けさにしろがねの錢
かぞへてゐたり

紅き日の落つる野末のすまの石の間のまのかそけき蟲に
聞き入りにけり

足もとの石のひまより静けさに顫ひて出づる
こほろぎのこゑ

入りつ日の入りかくろへば露満つる秋野の末
にこほろぎ鳴くも

うちどよむあまたを過ぎてしら露のゆふ凝る
原にわれは來にけり

星おほき花原くれば露は凝りみぎりひだりに
こほろぎ鳴くも

濠のみづ干ゆけばここに細き水流れ會ふかな
夕ひかりつつ

女の童をとめとなりて泣きし時かなしく吾は
おもひたりしか

さにづらふ少女ごころに酸漿の籠らふほどの
悲しみを見し

こほろぎはこほろぎゆるるに露原に音をのみぞ
鳴く音をのみぞ鳴く (九月作)

7 折に觸れて

なみだ落ちて懐^{なつか}しむかもこの室^{むろ}にいにしへ人
は死に給ひにし(宇規十周忌三首)

自^{みづか}からをさげすみ果てし心すら此^{この}夜^よはあはれ
和^{なご}みてを居ぬ

しづかに眼^めをつむり給ひけむ自^{みづか}づからすべて
は冷^{ひや}たくなり給ひけむ

涙ながししひそか事も消ゆるかや吾^{われ}より秋な
れば梧^き梗^{かき}は咲きぬ(録三首)

きちかうのむらさきの花萎^{しほ}む時わが身は愛^はし
とおもふかなしみ

さげすみ果てしこの身も堪へ難くなつかしき
ことありあはれあはれわが少女

栗の實の笑みそむるころ谿越えてかすかなる
灯に向ふひとあり (録三首)

かどはかしに逢へるをとめの物語あはれみに
つつ谿越えにけり

死に近き狂人を守るはかなさに己が身すらを
愛しとなげけり

照り透るひかりの中に消ぬべくも蟋蟀と吾と
なげかひにけり

つかれつつ目ざめがちなるこの夜ごろ寐より
さめ聞くながれ水かな

朝さざれ踏みの冷めたくあなあはれ人の思おもひの
湧ききたるかも

秋川のさゞれ踏み行き踏み來とも落ちるぬ心
君知るらむか

土のうへの生けるものらの潜ひそむべくあな慌し
秋の夜の雨

秋のあめ煙りて降ればさ庭べに七面鳥しちめんどうは羽も
ひろげず

寒ざむとひと夜の雨のふりしかば病める庭鳥
をいたはう兼ねつ

ほそほそとこほろぎの音はみちのくの霜ふる
國へとほ去りぬらむ

遠き世のガレ
Ornamentum loci をかなしみぬ。わけは
東海の國の伽羅の木かけ Pluma loci と
いひてなげかふ。

大正元年

山ふかき落葉のなかに光り居る寂しきみづを
われは見にけり

寒^{さむ}ざむとゆふぐれて來る山のみち歩^{あゆ}めば路^{みち}は
濡^ぬれてゐるかな

1 睦岡山中

しづかなる眼のごときひかりみづ山の木原に
動かざるかも

われひとり山を越えつつ見入りたる水はする
どく寒くひかれり

都會のどよみをとほくこの水に口觸れまくは
悲しがるらむ

天さかる鄙の山路にけだものの足跡を見れば
こころよろしき

なげきより覺めて歩める山峽に黒き木の實は
こぼれ腐りぬ

寂しさに堪へて空しき吾の身に何か觸れて來
悲しがるもの

ふゆ山に潜みて木末のあかき實を啄みてゐる
鳥見つ今は

かせおこる木原をとほく入つ日のあかき光は
ふるひ流るも

赤光のなかの歩みはひそか夜の細きかほそき
こころにか似む（二月作）

2 木の實

しろがねの雪ふる山に人かよふ細ほそとして
路見ゆるかな

赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき
歩みなりけり

満ち足らふ心にあらぬ谿谷つべに酔をふける
木の實を食むころかな

山遠く入りても見なむうら悲しうら悲しとぞ
人いふらむか

紅葦の雨にぬれゆくあはれさを人に知らえず
見つつ來にけり

山ふかく谿の石原しらじらと見え來るほどの
いとほしみかな

かうべ垂れ我がゆく道にぼたりぼたりと椽の
木の實は落ちにけらすや

ひとり居て朝の飯食む我が命は短かからむと
思ひて飯はむ二月作

3 或る夜

くれなるの鉛筆きりてたまゆらは慎つしましきかな
われのこころの

をさな妻をとめとなりて幾いく百日もひこよひも最も早はや
眠りゐるらむ

寝いねがてにわれ烟草すふ烟草すふ少女をとめは最も早はや
眠りゐるらむ

いま吾は鉛筆をきるその少女安心あんしんをして眠り
ゐるらむ

我わが友ともは蜜柑むきつつしみみとはや抱いだきねと
いひにけらずや

けだものの暖かさうな寝すがた思ひうかべて
 獨り寝にけり

寒床にまろく縮まりうつらうつら何時のまに
 かも眠りゐるかな

水のべの花の小花の散りどころ盲目になりて
 抱かれて呉れよ 二月作

4 木こり

山腹の木はらのなかへ堅凝のかがよふ雪を踏
 みのぼるなり

ゆらゆらと空気を揺りて伐られたり斧の光れ
 ば大木ひともと

斧ふりて木を伐る側に小夜床の陰のかなしさ
歌ひてゐたり

雪の上を行けるをみなは堅飯と赤子を背負ひ
うたひて行けり

雪のべに火がとろとろと燃えぬれば赤子は乳
をのみそめにけり

杉の樹の肌はだへに寄ればあなかなしくれなるの油あぶら
滲み出るかなや

はるばるも來つれところは杉の樹の紅の脂あぶらに
寄りてなげかふ

みちのくの藏王の山のやま腹にけだものと人
ご生きにけるかも 二月作

5 犬の長鳴

よる更けてふと握飯くひたくなり握飯くひぬ
寒がりにつつ

われひとりねむらむとしてゐたるとき外はこ
がらしの行くおときこゆ

遠く遠く流るるならむ灯をゆりて冬の疾風は
外面に吹けり

長鳴くはかの犬族のなが鳴くは遠街にして火
かもおこれる

さ夜ふけと夜の更けにける暗黒にびようびよ
うと犬は鳴くにあらずや (三月作)

6 さみだれ

さみだれは何なにに降ふりくる梅うめの實みは熟うみて落おつ
らむこのさみだれに

にはさりの卵たまごの黄味きみの亂みだれゆくさみだれごろ
のあぢきなさかな

胡こ頰が子の果みのあかき色いろほに出でづるゆゑま秀まに出で
づるゆゑまに歎なげかひにけり(おくにを憶ふ)

ぬば玉たまのさ夜よの小床こゝろにねむりたるこの現身うつしみは
いとほしきかな

しづかなる女むすめおもひてねむりたるこの現身うつしみは
いとほしきかな

鳥の子のすまに果てむこの心もののはれと云
はまくは憂し

あが友の古泉千いづさち櫛は貧しけれさみだれの中を
あゆみゐたりき

けふもまた雨かとひとりごちながら三州味噌
をあぶりて食むも (六月作)

7 折々の歌

とろとろとあかき落葉おちば火もえしかば女の男の
童わらわあたりけるかも

雨ひと夜さむき朝けを目の下の死なねばなら
ぬ鳥見て立てり

ひごよ寝し街の悲しきひそみ土ここに白霜は
降りてゐるかも

猫の舌のうすらに紅き手ざはりのこの悲しさ
を知りそめにけり

ほのかなる茗荷の花を目守る時わが思ふ子は
はるかなるかも

をさな兒の遊びにも似し我がけふも夕かたま
けてひもじかりけり(研究室二首)

屈まりて脳の切片を染めながら通草のはなを
おもふなりけり

みちのくの我家の里に黒き蠶が二たびねぶり
目ざめけらしも(故郷三首)

障^まりあらずな
みちのくに病む母^は上^えにいささかの胡^き瓜^{うり}を送る

おきなぐさに脣^{くちびろ}ふれて歸りしがあはれあはれ
いま思ひ出でつも

秋に入る練^{れん}兵^{へい}場^{ばう}のみづたまりに小^こ蜻^{あき}蛉^つが卵^{たまご}を
生みて居りけり

曼^{まん}珠^{じゆ}沙^{しゃ}華^けここにも咲きてきぞの夜のひと夜の
相^{さがた}おもほゆるかも

現^{うつしみ}身のわれをめぐりてつるみたる赤^{あか}き蜻^{とん}蛉^ぼが
幾つも飛べり

酒の糟あぶりて室^{むろ}に食^はむこころ腎^{じん}虚^{きよ}のくすり
尋ねゆくこころ

けふもまた向ひの岡に人あまた群れゐて人を
葬りたるかな

何ぞもとのぞき見しかば弟妹らは龜に酒をば
飲ませてゐたり

太陽はかくろひしより海空に天の血垂りの雲
のたなびき

狂院に寝てをれば夜は温るし我がまぢかくに
蟾蜍は啼きたり

伽羅ぼくに伽羅の果こもりくろき猫ほそりて
あゆむ夏のいぶきに

蛇の子は色くろぐるとうまれつつ石の間にも
かくろひぬらむ

ほそき雨墓原はかばらに降りぬれてゆく黒土に烟草の
吸殻すびがらを投ぐ

墓はらを白足袋しろたびはきて行けるひと遠く小さく
なりにけるかも

萱草くわんざうをかなしと見つる目にいまは雨にぬれて
行く兵隊が見ゆ

墓はらを歩み來にけり蛇の子を見むと來つれ
ど春あさみかも

病院をいでて墓原かげの土踏めば何なにになごみ
來しあが心ぞも

松風の吹きゐるところくれなるの提灯つけて
分け入りにけり

8 夏の夜空

墓原に来て夜空見つ目のきはみ澄み透りたる
この夜空かな

なやましき眞夏なれども天なれば夜空は悲し
うつくしく見ゆ

きやう人を守りつつ住めば星のゐる夜ぞらも
久に見ずて經にけり

目をあげてきよき天の原見しかども遠の珍の
ここちこそすれ

ひさびさに夜空を見ればあはれなるかな星群
れてかがやきにけり

空見ればあまた星居りしかれども彌々とほく
ひかりつつ見ゆ

汗ながれてちまたの長路ゆくゆゑにかうべ垂
れつつ行けるなりけり

ひさびさに星空を見て居りしかば己れ親しく
なりてくるかも (七月作)

9 土屋文明へ

おのが身をあはれとおもひ山みづに涙落しし
君を偲ばむ

ものみなのだるゆるがごとき空戀ひて鳴かねば
ならぬ蟬のこゑ聞ゆ

もの書かむと考へるたれ耳ちかく蝸蟬なけば
あはれに聞ゆ

夕さればむらがりて来る油むし汗あえにつつ
殺すなりけり

かかる時菴羅あまらの木の實くひたらば心落居おちむと
おもふ寂しさ

むらさきの楮梗ききやうのつぼみ割りたれば葺現しへれて
にくからなくに

秋ぐさの花さきにけり幾朝いくあさをみづ遣りしかと
おもほゆるかも

ひむがしのみやこの市路いちぢをひとつのみ朝草車あさくさぐるま
行けるさびしさ (七月作)

10 狂人守

うけもちの狂人きやうじんも幾たりか死にゆきて折をりをり
あはれを感じるかな

かすかにてあはれなる世よの相すがたありこれの相すがたに
親しみにけり

くれなるの百日ひやくじつ紅こうは咲きぬれど此こゝきやうじん
はもの云はずけり

としわかき狂人きやうじん守りのかなしみは通草あけびの花の
散らふかなしみ

氣のふれし支那しなのをみなに寄り添ひて花は紅
しと云ひにけるかな

このゆふべ脳病院の二階より墓地見れば花も
見えにけるかな

ゆふされば青くたまりし墓みづに食血餓鬼は
鳴きかゝるらむ

あはれなる百日紅ひゃくじつこうの下かげに人力車じんりくしゃひとつ見
えにけるかな (九月作)

11 海邊にて

眞夏の日てりかがよへり渚なみさきにはくれなゐの玉
ぬれてゐるかな

海の香は山ふかき國くにに生れたる我のこころに
染まんとすらん

七夜寝て珠るる海の香をかげば哀れなるかも
この香いとほし

白なみの寄するなぎさに林檎食む異國をみな
はやや老いにけり

あぶらなす眞夏のうみに落つる日の八尺の紅
のゆらゆらに見ゆ

きこゆるは悲しきさざれうち浸す潮波とどろ
湧きたるならむ

岩かげに海ぐさふみて玉ひろふくれなるの玉
むらさき斑のたま

百鳥はいまだは啼かねわたつみは黒光りして
明けたるらむか

いささかの潮のたまりに赤きもの生きて居た
れば嬉しむかな

海の香はこよなく悲し珠ひろふわれのこころ
に染みにけるかも

櫻實の落ちてありやと見るまでに赤き珠ある
岩かげを來し

ながれ寄る沖つ藻見ればみちのくの春野小草
に似てを悲しも

荒磯べに歎くともなき蟹の子の常くれなるに
見ゆらむあはれ

かすかなる命をもちて海つもの美しくゐる荒
磯べに來し

海のべを紅毛の子の走れるを心しづかに我は
見て居り

くれなるの三角の帆がゆふ海に遠ざかりゆく
ゆらぎ見えすも

月ほそく入りなむとする海の上ほの暗くして
舟なかりけり

ぬば玉のさ夜ふけにして波の穂の青く光れば
戀しきものを

けふもまた岩かげに來つ靡き藻に虎斑魚の子
かくろへる見ゆ

しほ鳴のゆくへ悲しと海のべに幾夜か寝つる
この海のべに (九月作)

12 郊外の半日

今しがた赤くなりて女中を叱りしが郊外に來
て寒さむけをおぼゆ

郊外はちらりほらりと人行きてわが息づきは
和なごむとすらん

郊外に未だ落ちぬころもて蟻あま蛭むしにぎれば
冷つめたきものを

秋のかせ吹きてゐたれば遠とほかたの薄うすのなかに
曼珠沙華赤し

ふた本の松立てりけり下かげに曼珠沙華赤し
秋かせが吹き

いちめんの唐辛子畑たがらに秋のかせ天あまより吹きて
鴉からすおりたつ

いちめんいに唐辛子あかき畑みちに立てる童わらべの
まなこまさし

曼珠沙華咲けるところゆ相むれて現身うつしみに似ぬ
囚人は出づ

草の實はこぼれんとして居たりけりわが足元あしもと
の日の光かも

赭土はにはこぶ囚人しうじんの眼めの光るころ茜さす日は傾
きにけり

トロッコを押す一人ひとりの囚人はくちびる赤し我われ
をば見たり

片方に松二もとは立てりしが囚はれ人は其處
を通りぬ

秋づきて小さく結りし茄子の果を籠に盛る家
の日向に蠅居り

女のわらは入日のなかに兩手もて籠に盛る茄
子のか黒きひかり

天傳ふ日は傾きてかくろへば栗養る家にわれ
いそぐなり

いとまなきわれ郊外にゆふぐれて栗飯食せば
悲しこよなし

コスモスの闇にゆらげばわが少女天の戸に残
る光を見つつ (十月作)

13 葬り火

黄涙餘録の一

あらはなる棺ひつぎはひとつかつがれて穩田たんばしを
今わたりたり

自殺じそくせし狂者きやうしやの棺くわんのうしろより眩暈めまひして行け
り道みちに入日いりひあかく

陸橋りくけうにさしかかるとき兵來へいれば棺ひつぎはしまし地ち
に置かれぬ

まなこよりわれの涙なみだは漲はぶるとも人に知らゆな
悲かなしきゆゑに

ひとねむるさ夜中よなにしてあな悲かなし狂人きやうじんの自殺じそく
果はてにけるはや

死なねばならぬ命いのちまでもりて看護婦はしるき火
 かがぐ狂院のよるに

自みづからのいのち死なんぞ直ひたいそぐ狂人を守りて
 寝いねざるものを

土のうへに赤棟あかむね蛇遊へびあそびばすなりにけり入る日あ
 かあかと草はらに見ゆ

歩兵隊代々木あしへいたいだいごぎのはらに群ぐんれぬしが狂人きやうじんのひつ
 ぎひとつ行くなり

赤光あかひかりのなかに浮うびて棺くわんひとつ行き遙はるけかり野
 は涯はてならん

わが足より汗いでてやや痛みあり靴にたまり
 し土ほこりかも

火葬場に細みづ白くにごり來も向うにひとが
米を磨ぎたれば

死はも死はも悲しきものならざらむ目のもと
に木の實落つたはやすきかも

兩手をばズボンの隠しに入れ居たりおのが身
を愛しと思はねごさびし

葬り火は赤々と立ち燃ゆらんか我がかたはら
に男居りけり

うそ寒きゆふべなるかも葬り火を守るをとこ
が欠伸をしたり

骨瓶のひとつを持ちて價を問へりわが口は乾
くゆふさり來り

納骨の箱は杉の箱にして骨がめは黒くならび
たりけり

上野なる動物園にかささぎは肉食ひるたりく
れなるの肉を

おのが身しいとほしきかなゆふぐれて眼鏡の
ほこり拭ふなりけり

14 冬 來

黄涙餘録の二

自殺せる狂者をあかき火に葬りにんげんの世
に戦きにけり

けだものは食もの戀ひて啼き居たり何といふ
やさしさぞこれは

ベリカンの嘴くちばしうすら赤くしてねむりけりかた
はらの水みづ光ひかりかも

ひたいそぎ動物園にわれは來きたり人のいのち
をおそれて來きたり

わが目より涙ながれて居たりけり鶴つるのあたま
は悲しきものを

けだもののにほひをかげば悲しくもいのちは
明あかく息いきづきにけり

支那しな國こくのほそき少女せうにょの行きなづみ思ひそめに
しわれならなくに

さけび啼なくけだものの邊へに潜ひそみゐて赤べき葬はなり
の火ひこそ思へれ

鱈の子も居たりけりみづからの命死なんとせ
すこの鱈の子は

くれなるの鶴のあたまに見入りつつ狂人守を
かなしみにけり

はしきやし曉星學校の少年の頬は赤羅ひきて
冬さりにけり

泥いろの山椒魚は生きんとし見つつしをれば
しづかなるかも

除隊兵寫真をもちて電車に乗りひんがしの空
明けて寒しも

はるかなる南のみづに生れたる鳥ここにゐて
なに欲しみ啼く

15 柿乃村人へ

黄涙餘録の三

この夜ごろ眠られなくに心すら細らんとして
告げやらましを

たのまれし狂者きやうじやはつひに自殺せりわれ現うつなく
走りけるかも

友のかほ青ざめてわれにも云はず今は如何
なる世の相すがたかや

おのが身はいとほしければ赤やま棟蛇かたがしも潜みたる
なり土の中なかふかく

世の色相いろがらのかたはらにゐて狂者きやうじやもり悲しき涙
湧きいでにけり

やはらかに弱きいのちもくろぐると甲はんと
してうつつともなし

寒ぞらに星ゐたりけりうらがなしわが狂院を
ここに立ち見つ

かの岡に瘋癲院のたちたるは邪宗來より悲し
かるらむ

みやこにも冬さりにけり茜さす日向のなかに
瓮削りて居る

遠國へ行かば剃刀のひかりさへ馴れて親しと
いへば歎かゆ 午一月作

16 ひとりの道

霜ふればほろほろと胡麻の黒き實の地につく
なし今わかれなむ

夕凝りし露霜ふみて火を戀ひむ一人のゆゑに
こころ安けし

ながらふるさ霧のなかに秋花を我摘まんとす
人に知らゆな

白雲は湧きたつらむか我ひとり行かむと思ふ
山のはざまに

神無月空の際涯よりきたるとき眼ひらく花は
あはれなるかも

ひとりなれば心安けし谿ゆきて黒き木の實も
食ふべかりけり

ひかりつつ天を流るる星あれど悲しきかもよ
われに向はず

おのづからうら枯るる野に鳥落ちて啼かざり
しかも入日赤きに

いのち死にてかくろひ果つるけだものを悲し
みにつつ峽に入りつも

みなし兒の心のごとし立ちのぼる白雲の中に
行かむとおもふ

もみち斑に照りとほりたる日の光りはさまに
われを動かざらしむ

わが歩みここに極まり雲くだるもみぢ斑のな
かに水のみにけり

はるけくも山がひに來て白樺に觸りて居たり
冷たきその幹

ひさかたの天のつゆじもしとしとと獨り歩ま
む道ほそりたり (十一月作)

17 青山の鐵砲山

赤き旗けふはのぼらずごんたくの鐵砲山に小
供らが見ゆ

日だまりの中に同様のうなるらは皆走りつつ
居たりけるかも

銃丸じゆうぐわんを土より掘りてよろこべるわらべの側そばを
行き過ぎりけり

青竹を手に振りながら童子どうじ来て何か落ちぬ
面持おももちをせり

ゆふ日とほく金かねにひかれば群童ぐんどうは眼めつむりて
斜面しゃめんをころがりけり

群童ぐんどうが皆ころがれば丘かみへの童女どうにょかなしく笑
ひけるかも

いちにんの童子どうじころがり極まりて空見たるか
な太陽たいやうが紅し

射的場しゃてきばに細みづ湧きて流れければ童わらべふたりが
水のべに來し (十月作)

18 折に觸れて

くろぐろと圓つぶらに熟うるる豆ま柿がきに小鳥つばはゆきぬ
つゆじもはふり

藏ざう王山おうざんに雪ゆきかも降ふるといひしときはや斑はげなり
といらへけらすや

狂者きやうらは Paederastie をなせりけり夜よしんしんと
更さらけがたきかも

ゴオガンの自畫像じざうみればみちのくに山やま蠶こ殺ころし
しその日ひおもほゆ

をりをりは腦解剖のうかいぶ書しよ讀よむことありゆゑ知らに
心こころつつましくなり

水のうへにしらじらと雪ふりきたり降りきたり
りつつ消えにけるかも

身ぬちに重大ぢゅうたいを感せざれども宿直とくるのよるにう
なじ垂れぬし

この里さとに大山おほやま大將住むゆるゑにわれの心の嬉し
かりけり (十二月作)

19 雪ふる日

かりそめに病みつつ居ればうらがなし墓はら
とほく雪つもる見ゆ

現身うつしみのわが血脈けちみやくのやや細り墓ほち地にしんしんと
雪つもる見ゆ

あま霧し雪ふる見れば飯をくふ囚人のこころ
われに湧きたり

わが庭に驚ら啼きてゐたれども雪こそつもれ
庭もほどろに

ひさかたの天の白雪ふりきたり幾とき経ねば
つもりけるかも

批把の木の木ぬれに雪のふりつもる心愛憐み
しまらくも見し

さにはべの百日紅のほそり木に雪のうれひの
しらじらと降る

天つ雪はだらに降れどさにづらふ心にあらぬ
心にはあらぬ (十二月作)

20 宮 益 坂

向うにも女おんなは居たり青き甕かめもち童子ごうじになにか
いひつけしかも

馬に乗りて陸軍將校きたるなり女難おんながたの相さうか然
にあらじか (十二月作)

大正二年

1 さんげの心

雪のなかに日の落つる見ゆほのぼのと懺悔まごいの
心こころかなしかれども

こよひはやがく學問もんしたき心起りたりしかすがに
われは床にねむりぬ

風ひきて寝てゐたりけり窓の戸に雪ふる聞ゆ
さらさらといひて

あわ雪は消なば消ぬがに降りたれば眼悲しく
消ぬらくを見む

腹ばひになりて朱の墨すりしころ七面鳥に泡
雪は降りし

ひる日中床の中より目をひらき何か見つめん
と思ほえにけり

雪のうへ照る日光のかなしみに我がつく息は
ながかりしかも

赤電車にまなこ閉づれば遠國へ流れて去なむ
こゝろ湧きたり

家いへゆりてとどろと雪はなだれたり今夜こゝろは最早もはや
幾時いくときならむ

しんしんと雪ゆきふる最上もがみの上かみの山やまに弟あには無常むじやうを
感じたるなり

ひさかたの光ひかりに濡ぬれて縦たしるやし弟あには無常むじやうを
感じたるなり

電燈でんとうの球たまにたまりしほこり見ゆすなはち雪は
なだれ果はてたり

天霧あまぎりらし雪ふりてなんぢが妻は細りつつ息いきを
つかむとすらし

あまつ日ひに屋上おくじやうの雪かがやけりしづごころな
きいまのたまゆら

しろがねのかがよふ雪に見入りつつ何を求め
むとする心ぞも

いまわれはひとり言いひたれども哀れあはれ
かかはりはなし

ゆふぐれて心せはしく街ゆけば街には女おほ
くゆくなり (二月作)

2 根岸の里

にんげんの赤子を負へる子守居りこの子守は
も笑はざりけり

日あたれば根岸の里の川べりの青路のたう揺
りたつらむか

く
か
れた
た
け
の
根
岸
里
べ
の
春
浅
み
屋
上
の
雪
凝
り
て

角
兵
衛
の
を
さ
な
童
の
を
さ
な
さ
に
足
を
と
ど
め
て
我
は
見
ん
と
す

子
あ
ら
は
れ
に
け
り
笛
の
音
の
と
ろ
り
ほ
ろ
ろ
と
鳴
り
ひ
び
き
紅
色
の
獅



く
れ
た
け
の
春
淺
み
屋
上
の
雲
凝
り
て
か
が
よ
ふ

角
兵
衛
の
を
さ
な
童
の
を
さ
な
さ
に
足
を
と
ど
め
て
我
は
見
ん
と
す

笛
の
音
の
と
ろ
り
ほ
ろ
ろ
と
鳴
り
ひ
び
き
紅
色
の
獅
子
あ
ら
は
れ
に
け
り



いとけなき額ひたいのうへにくれなるの獅子ししの頭かぶを
持つあはれさよ

春のかせ吹きたるならむ目めのものとひかりの光ひかりのなか
に塵ちりうごく見ゆ

ながらふる日光ひかりのなかひさ一ひといろに我われのいのちの
めぐるなりけり (二月作)

3 きさらぎの日

狂院きやういんを早くまかりてひさびさに街まちをあゆめば
ひかり目に染む

平凡へいへんに涙をおとす耶蘇兵士やそへいしあかきじやけつを
着きつつ來きにけり

きさらぎの天あまつひかりに飛行船ひかうせんニコライ寺でらの
うへを走れり

杵きねあまた竝ならべばかなし一様いっやうにつぼの白米しろこめに落
ちおにけるかも

もろともに天てんを見上げし耶蘇士官やそしぐわんあかきじや
けつを着きたりけるかも

まほしげに空に見入りし女あり黄色のふね天
馳せゆけば

二月ぞらに黄いろの船の飛べるときしみじみ
として女をぞおもふ

この身はも何か知らねどいそほしく夜おそく
ゐて爪きりにけり 三月作

4 神田の火事

これやこの昨日の夜の火に赤かりし跡ごころ
なれや烟立ち見ゆ

天明けし焼跡どころ燃えかへる火中に音の聞
えけるかも

亡ぶるものは悲しけれども目の前にかかれと
てしも赤き火にほるぶ

たちのぼる灰燼のなかに黒眼鏡しろき眼鏡を
賣るぞ寂しき

あきうどは眼鏡よろしと言あげてみづからの
目に眼鏡かけたり (三月作)

5 口 ぶ え

このやうに何に顴骨たかきかや觸りて見れば
をみななれども

この夜をわれと寝る子のいやしさのゆる知ら
ねども何か悲しき

目をあけてしぬのめごろと思ほえばのびのび
と足をのばすなりけり

ひんがしはおけぼのならむほそほそと口笛ふ
きて行く童子あり

あかねさす朝明ゆるにひなげしを積みし車に
會ひたるならむ (五月作)

6 おひろ 其の一

なげかへばものみな暗しひんがしに出づる星
さへあかからなくに

とほくとほく行きたるならむ電燈を消せばぬ
ばたまの夜も更けぬる

夜よくれば小夜床こよどに寝ねしかなしかる面おもわも今は
無なしも小床こども

かなしみてたどきも知らず淺草あさくさの丹塗にの堂どうに
われは來きにけり

あな悲かなし觀音堂くわんおんどうに癡ち者しゃゐてただひたすらに錢ぜに
欲ほりにけり

淺草あさくさに來きてうで卵たまご買かひにけりひたさびしくて
わが歸かへるなる

はつはつに觸ふれし子こゆるゑにわが心こころ今は斑まだらに
嘆なげきたるなれ

代々よ木野ぎのをひた走りたりさびしさに生いの命いのちの
このさびしさに

さびしさびしいま西方せいほうにゆらゆらと紅あかく入る
目もこよなく寂し

紙屑かみくずを狭庭せうてい焚たきけばけむり立つ戀こひしきひとは
遙とほかなるかも

ほろほろとのぼるけむりの天あまにのぼり消え果
つるかに我も消ぬかに

ひさかたの悲かな天あまのもとに泣なきながらひと戀こひひ
にけりいのちも細く

放はなり投なげし風呂敷包ふろしきひろひ持ち抱いだきてゐたり
さびしくてならぬ

ひつたりといだきて悲かなしひとならぬ瘋癲ふんてん學がくの
書かきのかなしも

うづ高く積みし書物に塵たまり見の悲しもよ
たどき知らねば

つとめなればけふも電車に乗りにけり悲しき
ひとは遙かなるかも

この朝け山椒の香のかよひ来てなげくこころ
に染みとほるなれ

其の二

ほのぼのと目を細くして抱かれし子は去りし
より幾夜か経たる

愁じつつ去にし子ゆゑに藤のはな揺る光さへ
悲しきものを

しらたまの憂うれひのをみな我わがに來きたり流るるがごと
今は去りにし

かなしみの戀にひたりてゐたるこき白藤の花
咲き垂りにけり

夕やみに風たちぬればほのぼのと躑躅つとむの花は
散りにけるかも

おもひ出は霜ふる谿に流れたるうす雲の如く
かなしきかなや

あさぼらけひとめ見しゆゑしばだたくくろき
まつげをあはれみにけり

しんしんと雪ふりし夜にその指ゆびのあな冷ひやたよ
と言ひて寄りしか

狂院の煉瓦のうへに朝日子のあかきを見つゝ
なげきけるかな

わが生れし星を慕ひしくちびるの紅きをみな
をあはれみにけり

わが命つひに光りて觸りしかば否といひつつ
消ぬがにも寄る

彼のいのち死ねと云はばなぐさまめ我の心
は云ひがてぬかも

すり下す山葵おろしゆ滲みいでて垂る青みづ
のかなしかりけり

啼くこゑは悲しけれども夕鳥は木に眠るなり
われは寝なくに

其の三

愁^{うれ}へつつ去^いにし子ゆるるに遠山^{とほやま}にもゆる火ほど
の我^あがこころかな

あはれなる女^{をんな}の臉^{まぶた}戀ひ撫でてその夜ほとほと
われは死にけり

このこころ葬^{まう}らんとして來^{きた}りつる畑^{はたけ}に麥は赤
らみにけり

夏^{なつ}されば農園^{のうえん}に來て心ぐし水すましをばつか
まへにけり

藻^ものなかに潜^{ひそ}むるもりの赤き腹はつか見そめ
てうつつともなし

麥の穂に光のながれたゆたひて向うに山羊は
啼きそめにけり

この心葬り果てんと秀の光る錐を壘に刺しに
けるかも

わらじ蟲たたみの上に出で來しに烟草のけむ
りかけて我居り

念々にをんなを思ふわれなれど今夜もおそく
朱の墨するも

この雨はさみだれならむ昨日よりわがさ庭べ
に降りてゐるかも

つつましく一人し居れば狂院のあかき煉瓦に
雨のふる見ゆ

瑠璃るりいろにこもりて圓まるき草くさの實みは悲かなしき人の
まなこなりけり

ひんがしに星いづる時な汝なが見みなばその目めほの
ぼのそかなしくあれよ
(五月六月作)

7 死にたまふ母

其の一

ひろき葉は樹にひるがへり光りつつかくろひ
につつしづ心なけれ

白ふちの垂た花はなちればしみじみと今はその實みの
見えそめしかも

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんと
ぞただにいそげる

うちひさす都の夜にともる灯のあかきを見つ
つこころ落ちぬす

ははが目を一目を見んと急ぎたるわが額のへ
に汗いでにけり

灯あかき都をいでてゆく姿かりそめの旅と人
見るらんか

たまゆらに眠りしかなや走りたる汽車ぬちに
して眠りしかなや

吾妻やまに雪かがやけばみちのくの我が母の
國に汽車入りにけり

朝さむみ桑の木の葉に霜ふりて母にちかづく
 汽車走るなり

沼の上にかぎろふ青き光よりわれの愁うれの來こむ
 と云ふかや 白龍湖

上かみの山やまの停車場ていしやうに下くだり若わかくしていまは鰈やい夫をの
 おとうとを見たり

其の二

はるばると藥くすりをもちて來こしわれを目守まもりたま
 へりわれは子こなれば

寄り添よへる吾われを目守まもりて言いひたまふ何かいひ
 たまふわれは子こなれば

長押なる丹ぬりの檜に塵は見ゆ母の邊の我が
朝目には見ゆ

山いづる太陽光を拜みたりをだまきの花咲き
つづきたり

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ
天に聞ゆる

桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ
母呼びにけり

死に近き母が目に寄りをだまきの花咲きたり
といひにけるかな

春なればひかり流れてうらがなし今は野のべ
に蠓子も生れしか

死に近き母が額を撫りつつ涙ながれて居たり
けるかな

母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲し
もよ蠶のねむり

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし
乳足らひし母よ

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は
死にたまふなり

いのちある人あつまりて我が母のいのち死行
くを見たり死ゆくを

ひとり来て蠶のへやに立ちたれば我が寂しさ
は極まりにけり

其の三

檜ひのき若葉わかばてりひるがへるうつつなに山やま蠶こは青く
生あれぬ山蠶こは

日のひかり斑まだららに漏りてうら悲かなし山蠶こは未いだ
小さかりけり

葬はなり道みちすか**ん**ぼの華はなほほけつつ葬はなり道みちべに散
りにけらすや

おきな草くさ口くちあかく咲く野の道に光ながれて我われ
ら行きつもの

わが母を焼かねばならぬ火を持ってり天あまつ空そらに
は見るものもなし

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母
は燃えゆきにけり

さ夜ふかく母を葬りの火を見ればただ赤くも
ぞ燃えにけるかも

はふり火を守りこよひは更けにけり今夜の天
のいつくしきかも

火を守りてさ夜ふけぬれば弟は現身のうた歌
ふかなしく

ひた心目守らんものかほの赤くのぼるけむり
のその煙はや

灰のなかに母をひろへり朝日子のぼるがな
かに母をひろへり

落の葉に丁寧にあつめし骨くづもみな骨瓶こつびんに
入れしまひけり

うらうらと天てんに雲雀は啼きのぼり雪斑ゆきはららなる
山に雲るす

どくだみも薊あざみの花も焼けるたり人葬所ひとばうじよの天明あけみ
けぬれば

其の四

かざろひの春なりければ木の芽みな吹き出づ
る山へ行きゆくわれよ

ほのかなる通草あけびの花の散るやまに啼く山鳩の
こゑの寂しさ

山かげに雉子が啼きたり山かげに湧きづる湯
こそかなしかりけれ

酸^すき湯に身はかなしくも浸^{ひた}りゐて空にかがや
く光を見たり

ふるさとのわぎへの里にかへり来て白ふぢの
花ひでて食ひけり

山かげに消のこる雪のかなしさに笹かき分け
て急ぐなりけり

笹原をただかき分けて行き行けど母を尋ねん
われならなくに

火のやまの麓にいづる酸^{えん}の湯^ゆに一夜^{ひとよ}ひたりて
かなしみにけり

ほのかなる花の散りにし山のべを霞ながれて
行きにけるかも

はるけくも峽はざまのやまに燃ゆる火のくれなると
我が母と悲しき

山腹にとほく燃ゆる火あかあかと煙はうごく
かなしかれども

たらの芽を摘みつつ行けり山かげの道ほそり
つつ寂しく行けり

寂しさに堪へて分け入る山かげに黒々と通草くろぐろ
の花ちりにけり

見はるかす山腹なだり咲きてゐる辛夷しんいの花は
ほのかなるかも

藏王山に斑ら雪かもかがやくと夕さりくれば
 岨ゆきにけり

しみじみと雨降りゐたり山のべの土赤くして
 あはれなるかも

遠天を流らふ雲にたまきはる命は無しと云へ
 ばかなしき

やま峽に日はとつぷりと暮れゆきて今は湯の
 香の深くただよふ

湯ごころに二夜ねむりて蕁菜を食へばさらさ
 らに悲しみにけり

山ゆるに笹竹の子を食ひにけりははそはの母
 よははそはの母よ (五月作)

8 みなづき嵐

どんよりと空は曇りて居りしとき二たび空を
見ざりけるかも

わが體たにうつうつと汗にじみゐて今みな月の
嵐ふきたつ

わがいのち芝居しばに似ると云はれたり云ひたる
をそこ肥りゐるかも

みなづきの嵐のなかに顛たひつつ散るぬば玉の
黒き花みゆ

狂院きやういんの煉瓦の角かどを見ゐしかばみなづきの嵐ふ
きゆきにけり

狂じや一人蚊帳よりいでてまぼしげに覆盆子
 食べたしといひにけらすや

ながながと廊下を來つついそがしき心湧きた
 りわれの心に

蚊帳のなかに蚊が二三疋ゐるらしき此寂しさを
 告げやらましを

ひもじさに百日を経たりこの心よるの女人を
 見るよりも悲し

目を吸ひてくろぐろと咲くダアリヤはわが目
 のもとに散らざりしかも

かなしさは日光のもとダアリヤの紅色ふかく
 くろぐろと咲く

うつうつと濕り重たくひさかたの天低くして
動かざるかも

たたなはる曇りの下を狂人はわらひて行けり
吾を離れて

ダアリヤは黒し笑ひて去りゆける狂人は終りに
かへり見すけり (六月作)

9 麥 奴

病監の窓のしたびに紫陽花が咲き折をり風は
吹き行きにけり

いそぎ来て汗ふきにけり監獄のあかき煉瓦に
降れるさみだれ

飯いひかしく煙けむりならむと鉛筆の秀ほを研きながらひ
とりおもへり

監房より今しがた來し囚人しうじんはわがまへにゐて
すこし笑わらみつも

光もて囚人の睡ひさみてらしたりこの囚人を觀みざる
べからず

紺いろの囚人の群むら笠かむり草刈るゆるゑに光る
その鎌

監獄に通ひ來しより幾日經し蝸啼かまかなきたり二つ
啼きたり

まはりみち畑にのぼればくろぐると麥奴むぎのこは棄
てられにけり (七月作)

10 七月二十三日

めん雞きら砂すなあび居ゐたれひつそりと剃か刀た研と人びは
過ぎ行きにけり

夏なつ休やす日ひわれももらひて十日じゅうにちまり汗あせをながして
なまけてゐたり

たたかひは上海しやんはいに起り居ゐたりけり鳳仙花ほうせんか紅あかく
散りゐたりけり

十日なまけけふ来て見れば受持うけもちの狂人きやうじんひと
死しに行きて居し

鳳仙花ほうせんかかたまりて散るひるさがりつくづく
われ歸りけるかも (七月作)

11 屋上の石

あしびきの山の峽はたけをゆくみづのをりをり白く
たぎちけるかも

しら玉の憂うれひのをんな戀こひひたづね幾いくやま越えて
來りけむかも

鳳仙花城あとに散り散りたまる夕ゆふかたまけて
忍び來にけり

天そそるやまのまほらに夕ゆふよどむ光を見つつ
あひ歎なげきつも

屋上やじょうの石は冷めたしみすすかる信濃のくにに
我は來にけり

屋根の上に尻尾動かす鳥來りしばらく居つつ
飛びにけるかも

屋根踏みて居ればかなしもすぐ下の店に卵を
數へゐる見ゆ

屋根にゐて微けき憂湧きにけり目したの街の
なりはひの見ゆ (七月作)

12 悲報來

七月三十日夜、信濃國上諏訪に居りて、伊藤左千夫先生逝
去の悲報に接す。すなはち予は高木村なる島木赤彦宅
へ走る。時すでに夜半を過ぎゐたり。

ひた走るわが道暗ししんしんと恠へかねたる
わが道くらし

すべなきか螢ほたるをころす手のひらに光つぶれて
せんすべはなし

ほのぼのとおのれ光りてながれたる螢ほたるを殺す
わが道くらし

氷室ひむろより氷こほりをいだし居る人はわが走る時もの
を云はざりしかも

氷きるをとこの口のたばこの火赤あかかりければ
見て走りたり

死にせれば人は居ぬかなと歎なげかひて眠り薬を
のみて寝んとす

赤彦あかひこと赤彦が妻吾あに寝よと蚤とり粉こなを呉れに
けらすや

罌粟はたの向うに湖の光りたる信濃のくにに
目ざめけるかも

諏訪のうみに遠白く立つ流波つばらつばらに
見んと思へや

あかあかと朝焼けにけりひんがしの山竝の空
朝焼けにけり (七月作)

13 先師墓前

ひつそりと心なやみて水かくる松葉ぼたんは
きのふ植ゑにし

しらじらと水のなかよりふふみたる水ぐさの
花小さかりけり (八月作)

赤光
をほり

赤光目次

自明治三十八年至明治四十二年

1	折に觸れ(十七首).....	三
2	地獄極樂圖(十一首).....	九
3	螢と蜻蛉(五首).....	三
4	折に觸れて(二十首).....	一五
5	蟲(八首).....	三
6	雲(十四首).....	一五

明治四十三年

7	蒔しほ(八首).....	三〇
8	留守居(八首).....	三三
9	新年の歌(十四首).....	三六
10	雑歌(十一首).....	四一
11	鹽原行(四十四首).....	四五
12	折に觸れて(二十首).....	六〇
13	細り身(三十四首).....	六七
14	分病室(四首).....	七九
1	田螺と彗星(八首).....	八三

明治四十四年

2	をさな妻(十一首).....	八六
3	悼堀内卓(七首).....	九〇
1	此の日頃(八首).....	九六
2	おくに(十七首).....	九六
3	うつし身(十七首).....	一〇四
4	うめの雨(二十首).....	一一〇
5	藏王山(八首).....	一一七
6	秋の夜ごろ(十七首).....	一二〇
7	折に觸れて(廿首).....	一二六

大正元年

1	睦岡山中(十一首).....	一三五
2	木の實(八首).....	一三九
3	或る夜(八首).....	一四三
4	木こり(八首).....	一四五
5	犬の長鳴(五首).....	一四八
6	さみだれ(八首).....	一五〇
7	折々の歌(二十六首).....	一五三
8	夏の夜空(八首).....	一六三
9	土屋文明へ(八首).....	一六五

10	狂人守(八首).....	一六八
11	海邊にて(廿首).....	一七一
12	郊外の半日(十七首).....	一七六
13	葬り火(廿首).....	一八四
14	冬來(十四首).....	一九二
15	柿の村人へ(十首).....	一九六
16	ひとりの道(十四首).....	二〇〇
17	青山の鐵砲山(八首).....	二〇五
18	折に觸れて(八首).....	二〇八
19	雪ふる日(八首).....	二一一

20 宮益坂(二首)……………二二四

大正二年

1 さんげの心(十七首)……………二二七

2 根岸の里(八首)……………二二三

3 きさらぎの日(八首)……………二二六

4 神田の大事(五首)……………二二九

5 口ぶえ(五首)……………二三二

6 おひろ(四十四首)……………二三三

7 死にたまふ母(五十九首)……………二四〇

8 みなづき嵐(十四首)……………二七〇

9 麥奴(八首)……………二七五

10 七月二十三日(五首)……………二七八

11 屋上の石(八首)……………二八〇

12 悲報來(十首)……………二八三

13 先師墓前(二首)……………二八七

挿 畫

蜜柑の收穫……………木下 奎 太 郎 氏
 彫 刻……………伊 上 凡 骨 氏
 通草のはな……………平 福 百 穂 氏
 三色版……………田 中 製 版 所
 佛 頭……………木 下 奎 太 郎 氏

「赤光」初版跋

○明治三十八年より大正二年に至る足かけ九年間の作八百三十三首を以て此一卷を編んだ。たまたま伊藤左千夫先生から初めて教をうけた頃より先生に死なれた時までの作になつてゐる。アララギ叢書第二編が予の歌集の割番に當つた時、予は先づ此一卷を左千夫先生の前に捧呈しようと思つた。而して、今から見ると全然棄てなければならぬ様なひどい作迄も輯録して往年の記念にしようとした。特に近ごろの予の作が先生から褒められるやうな事は殆ど無かつたゆゑに、大正二年二月以降の作は雑誌に發表せず此歌集に收めてから是非先生の批評をあふがうと思つて居た。ところが七月卅日の、この歌集編輯がやうやく大正二年度が終つたばかりの時に、突如として先生に死なれて仕舞つた。そ

れ以來氣が落つかず、清書するさへものうくなつて、後半の順序の統一しないのもその儘におくやうになつたのは其爲めである。はじめの心と今の心と何といふ相違であらう。それでもどうか歌集は出来上がった。悲しく予は此一巻を先生の靈前にささげればならぬ。

○平福百穂、木下杢太郎の二氏が特に本書のために繪を賜はつた事を予は光榮に思つてゐる。そのうち杢太郎氏の佛頭圖は明治四十三年十月三田文學に出た時分から密かに心に思つて居たものである。このたび予の心願なつて到々予のものになつたのである。また、本書發行に就いて予を勵まし便利を與へられた長塚節、島木赤彦、中村憲吉、巖桐軒、古泉千樞の諸氏並びに信濃諸同人に對し、又「とうとうと喇叭を吹けば」の句を呉れた清水謙一郎氏に對し感謝の念をささげればならぬ。

○文法の誤の數ヶ所あること。送假名法の一定せざること。漢字使用法の曖昧な

ること等は、億劫な爲めにその儘にして置いた。本書の作物は今ごろ發行して讀んでもらふのには、工合の悪いのが多い。併し同じく讀んでもらふうへは自分に比較的親しいのを讀んでもらうと思つて、新しい方を先にした。はじめの方を一寸讀んで頂くといふ心持である。本書は予のはじめての歌である。世の先輩諸氏からいろいろ教へて頂いてもつと勉強したい。

○本書の「赤光」といふ名は佛說阿彌陀經から採つたのである。彼の經典には「池中蓮華大如車輪青色青光黄色黄光赤光赤光白色白光微妙香潔」といふところがある。予が未だ童子の時分に遊び仲間には難法師が居て切りに御經を誦誦して居た。梅の實をひろふにも水を浴びるにも「しやくしき、しやくくわう、びやくしき、びやくくわう」と誦して居た。「しやくくわう」とは「赤い光」の事であると知つたのは東京に来て、新刻訓點淨土三部妙典といふ赤い表紙の本を買つた時分であつて。あだかも露伴の「日輪すでに赤し」の句を發見して嬉しく思つ

たころであつた。それから繰つて見ると明治三十八年は予の廿四歳のときであ
ら。大正二年九月二十四日よりしるす。

「赤光」再版に際して

○多忙の身の上の故に「赤光」の歌も初版校正出来しみじみと繰讀せずを経た。
「赤光」の初版發行は大正二年十月である。いま初版が賣切れて再版發行の運に
到つたと聞くと、何となく嬉しい心が湧く。「赤光」の歌は私の敬愛する先輩諸
氏からも遠國土に住むまだ知らない人々からも愛されて、さうして私は少し有
名になつた。

○おもふに短歌のやうな體の抒情詩を大つびらにするといふことは、切腹面相
を見せるやうなものであるかも知れない。むかしの侍は切腹して臍腑も見せて

ぬる。さうして西人は此のころを besondere Ehrgeiz などいふ語の内容に關
聯せしめてもの言つてゐるが、「赤光」發行當時の私のころは、少し色合が違
つてゐた。大正元年九月の歌

銀 錢 光

とりいだす紙つゝみよりあらはるゝ銀貨のひかりかなしかりけれ

電燈をひくゝおろしてしろがねの錢かぞふればこほるぎが啼く

さ夜ふけと夜はふけぬらし銀の錢かぞふればその音ひびきたるかな

わがまなこ當面に見たり疊をばころがり行きし銀錢のひかり

しみじみと紙幣の面をながめたりわきて氣味わるきものにはあらず

などがある。當時雜誌アララギの會計係であつた私は、常にアララギの賣行を氣
にしてゐた。その後アララギはだんだん發行を續けて倒れずにゐる。私の微か
な歌集赤光がアララギとどういふ關係に立ちそれか如何に續いて來たかを念ふ

ときいろいろの追憶が湧いてくる。

○白面の友がきて、「赤光」は大正初年以後の短歌界に小さいながら一期を劃すやうに働掛けたと言放つ。私はその詞に對つてゐて苦笑もしない。ある夜、現歌壇の一部の Schematismus に對して「赤光」がいかに働掛けたかを思つたときいたく眉間を蹙めた。けれどもかかることは私の關するところではない。「赤光」は過去時に於ける私の悲しい命の捨どころであつた。

○歌づくりを現世出世の道とおもふな。そしてなほ歌をつくつてゐる。西國觀世音の札所を巡つて來た故里の老いたる父は「茂吉は歌などつくるさうだな」と云つた。それから田植が忙しいからと云つて歸國した。いまは故里に梅の實黄に落ち、蠶は繭になり、その繭は絹糸になつて、藏王山の雪はだらに、それが消え、通草の實いよいよふくれて、大自然といへども刻々に變化してやむ時がない。「赤光」の再版に際して心に浮んだ斷片を書きつけ置く。大正四年七月一日

夜書山にて茂吉しるす。

『赤光』三版に際して

「赤光」が賣切れて第三版を發行するといふことを東雲堂主人が通知して來た。私は嬉しいと思つた。そこで久々で「赤光」の歌を讀んでみた。いかにも不満な歌が多いので今更かなしんでゐる。かつてはいふつもりで居つたのであつて、それが今は駄目である。私は自分で少しづつ直したいと思つたけれども、その暇がない、それゆゑに耻かしいけれども元の儘で第三版を發行し、私の歌を讀まれたかたがたに感謝してゐる。大正七年四月廿三日。長崎にて齋藤茂吉記。

改選「赤光」跋

「赤光」の第五版が品切になつてからもう一年ぐらゐになるさうである。第三版を發行するさき、僕は長崎にゐて「赤光」の歌の不滿なのをどころどころ象嵌して直さうとしたが、忙しいので果さなかつた。大正九年十月の丁度今ころである。僕は「あらたま」の編輯を終へてからその原稿を東京へ送つて、西浦上村六枚板といふところに轉地した。そこに五日間ばかりゐるうち、夜のひまひまに油煙のたつランプのももて、「赤光」の歌の餘りひごいのを直し或は削つた。それも長い間その儘になつてゐたが、やうやく大正十年九月すゑになつて、大いそぎで淨書し、順序を換へて舊い歌の方を先きにし、「あらたま」を體裁を揃へることにして、いよいよ改選「赤光」を發行することになつた。「赤光」の歌は

既にいるいろの書物に引用せられたけれども、今後「赤光」の歌を論ぜられる場合には、改選「赤光」の方に據つてもらひたいと思ふ。しかし直した歌が皆氣に入つてゐるさういふのではない。不滿の氣持は依然としてあるけれども、さう濫りには直すことをしない。僕の外遊の日は既に迫つた。僕は端的に改選「赤光」の前途を祝福する。大正十年十月十日。齋藤茂吉。東京青山にて。

大正二年十月十五日發行
大正四年七月三日再發行
大正七年五月二十三日再發行
大正八年三月二十七日再發行
大正十年十一月五日再發行

金貳圓參拾錢

著者 齋藤茂吉

發行者 東京市日本橋區檜物町九番地 西村辰五郎

印刷者 東京市芝區愛宕下町二丁目四番地 根本惣三郎

發行所

東京市日本橋區檜物町九番地

東雲堂書店

電話本局一八七一四番
振替東京五六一七四番

版權所有

